

# 尾崎喜八資料

## 第 8 号

尾崎喜八生誕百年記念特別号

尾崎喜八 著作年譜  
伊藤海彦・編／三宅 岳・撮影

\*

尾崎喜八への旅(二)／伊藤海彦————— 46

平成4年のできごと————— 48

富士見町・尾崎喜八記念施設の進行報告、他————— 49

\*

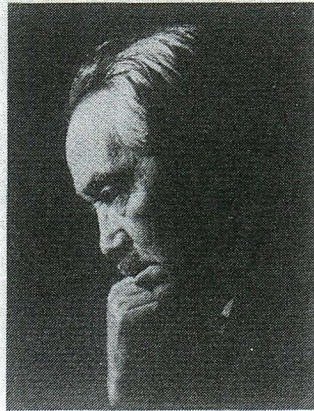
表紙題字／草野心平

尾崎喜八研究会

1993年3月

# アルプ

特集 尾崎喜八



Alp 196 1974 6

月刊誌「アルプ」No.196 特集・尾崎喜八(創文社、昭和49年6月号)  
上野毛時代の喜八のポートレート(撮影・三宅修)が表紙を飾っている。

## 尾崎喜八著作年譜の構成について

本号収録の著作年譜は、喜八の追悼号となった「アルプ」一九六号に二七頁にわたって掲載された伊藤海彦氏の年譜を元に、喜八没後の刊行物、最近の調査によって新たに判明した刊行物などを伊藤氏に加筆していただき、再構成したものである。一九九三年時点で現存する著作をほぼ網羅してある。

アルプ版の年譜は、伊藤海彦氏と当時の創文社編集長・大洞正典氏によって次のような斬新なレイアウトが施されている。

上段……著作の題名、出版社、刊行年月日、版型などのデータ、伊藤氏による補注。

下段……主要な著作の序文・後書類、重要な編著、文庫などの解説類の抜粋。一部の著作の写真。

本号ではこれを踏襲しつつ、「尾崎喜八資料」の版型にふさわしい形に編集部が再編した。詳しくは次頁「凡例」を参照されたい。

アルプ版では、著作の写真は三宅修氏が八点九冊を撮影している。しかしその後の約二〇年の間に、戦後出版されたものさえ稀観本となり、後続の世代が喜八の著作を刊行当時の姿で知ることがますます困難になりつつある。こうした事情を考慮し、本号では、新たに三宅岳氏による再度の撮影を行い、七一冊を掲載。併せて著作内のカット、写真など資料的に重要と思われるものを適宜加えている。

(石黒敦彦)

# 尾崎喜八著作年譜

伊藤海彦編

## 〔凡例〕

○本文は以下のように構成されている。

〔右頁〕 上段……著作の題名、出版社、刊行年月日、版型などのデータ、伊藤海彦氏による補注。

中段……上段の著作の写真（一部）。

下段……主要な著作の序文・後書類、重要な編著、文庫などの解説類の抜粋。（上段に対応）

〔左頁〕 上段の著作の写真、著作内に掲載されている写真・カットなど。同じ著作の序文、後書類からの抜粋。

○著作の配列は年代順である。

○中高校生向けの詩華選で喜八を取り上げているものなどは年譜から除外してある。

○\*印のある文章は伊藤氏による補注である。

（編集部）

## 1 ロマン・ロラン 近代音楽評傳

大正五年十二月十八日、洛陽堂発行。四二四頁、定価一円四十銭。四六判、丸背、箱入。恩地孝四郎装幀。

\*本文扉に「長与善郎君の家庭にありし日の記念のために」とある。『今日の音楽家』の英訳版よりの重訳。ダンデイ、ペロジ、の評伝及び一篇の評論を省き、かわりに『過去の音楽家』より「モーツアルト」を加えている。

## 2 ベルリオ 自傳と書翰

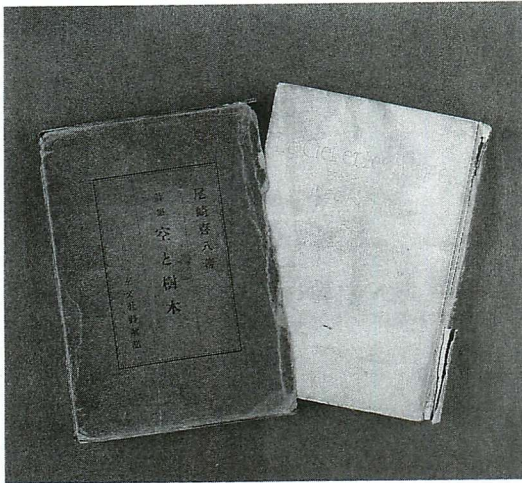
大正九年十二月十五日、叢文閣発行。五二二頁、定価三円二十銭。四六判、布装丸背、箱入。

\*ベルリオーズ肖像とその筆跡写真あり。扉に「此の訳書を、高村光太郎、高橋元吉、倉田賢一の三兄弟に捧ぐ」と献辞。

## 3 詩集 空と樹木

大正十一年五月十日、玄文社詩歌部発行。四六判、丸背天金、箱入。二三一頁(他)序四頁、目次五頁、「高田博厚君に就いて」(四頁)定価一円。

\*二部に分れ、その一部をなす「我がリトム」には「高村光太郎兄に贈る」とあり「空と樹木」には「千家元麿兄に贈る」とある。巻頭に高田博厚作になる尾崎喜八のブロンズ像の写真、扉と本文中に一葉、同じく高田博厚のデッサンを収む。喜八は詩集やその他の著作の表題をフランス語やドイツ語にも置きかえて記すことが多かった。ある時は外国語の美しい響きからひき出されたイメージで表題が選ばれ、又ある時は日本語での着想を外国語に置きかえて、尚その確かさを味わうという風であった。ちなみにこの処女詩集の表紙にはアールヌーボー風な意匠的な書体のフランス語で Le Ciel et Les Arbres. Précédées de Mes Rythmes par Kinachi Ozaki と記されている。



一切を措いて自分は此書を等しき昂奮と感激とを以て訳した。自分は其処から大いに学ぶべき処のものを得た。底に寂寥を湛へた此の人生の日々にあつて、此書は一の慰めの手である。人は其処から真の人生を知り、人間を知り、ヒーロイズムを知り、愛を知る事が出来る。此書は実に遙かなる、しかも最も近い内心の愛の故郷から来た。そは吾等が母なる地から来た。愛を通しての理解を措いて此書を論ずるものは誤つて居る。此書が単に興味を以て書かれ、皮肉を喜ぶ性情によつて書かれ、技巧を論ずる目的によつて書かれ、そして自己の学殖を誇示する為に書かれたものでない事は、直ちに読者の感ずる処であらう。それは直接に人格から来た。精神から来た。評論の為めの評論からは来なかつた。「心へ行くために心から来た」のである。(『近代音楽家評傳』「訳者序言」より)



高田博厚・作  
尾崎喜八の頭部ブロンズ像

たとへ如何なる環境にあつても私は歌ふ事を第一としたい。自分の岸辺にも同じ青浪の打ち寄せる、同じ日光の輝き同じ嵐の吹き荒ぶ、静穏と暴風との人生の海を飽までも歌ひたい。その多彩な種々相と、その深遠な思想と、そしてその不死の憧憬に値する未来の水平線こそ私の取扱ふ主題の一切でなければならぬ。人間として私の存在の理由は、私自身がより強くより正しく生きる事によつて歌ひ、より明らかにより美しく歌ふ事によつて生きるといふ、この単純で熱烈な要求を實行する事の外にはない。それでこそ私の生存に言訳が立つのである。そして此事は理窟でもなければ空想でもなく、常に私のうちに生きて育つてゐる実感である。(『空と樹木』「序」より)

4 ベルリオ ベートーヴェン交響樂の批判的研究  
 大正十二年六月二十日、仏蘭西書院發行。四六判  
 仮綴、一一七頁、定価一円五十銭。

5 詩集 高層雲の下

大正十三年六月十六日、新詩壇社發行。フランス綴、略装、カバー。一六五頁、定価一円五十銭。  
 \*カバーには喜八の真の意味での出発があったと思われる(そして喜八自身、後年しきりになつかしんでいる)上高井戸の小さな家の前に立つ肖像写真がある。喜八は『行人の歌』の後記でこの家のことを「まるで農園の事務所か山小屋のやうな、小さい家」といい、「数十本の若い桜の林を背に、借りた二段歩の畑に囲まれ、緑の屋根とクレオソートを塗った下見、四畳半わつか二間の家だった。純白に縁どつた窓々が大きく、居ながらにして丹沢の山の嶺線と富士とが見えた。其処へ当時二十歳になる今の妻が、羊飼の娘のやうにして私の嫁になりに来た。」と書いている。扉にも仕事場の肖像写真があるが、このカバーの立姿の方が、「君の顔は東欧の人間に似ている」とロランに言わしめた風貌である。なお、この詩集では別紙扉にフランス語の *Sous Le Hautstratus—Poèmes—* と書かれ、*Les AU TRÉS GRAND ET CHER / Romain Rolland / Sincèrement / K. O. ロラン・ロランへの誠意をこめた献辞がある。*

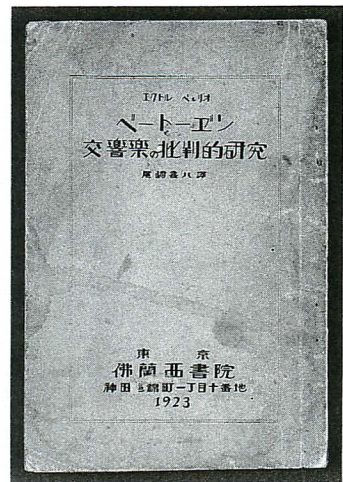
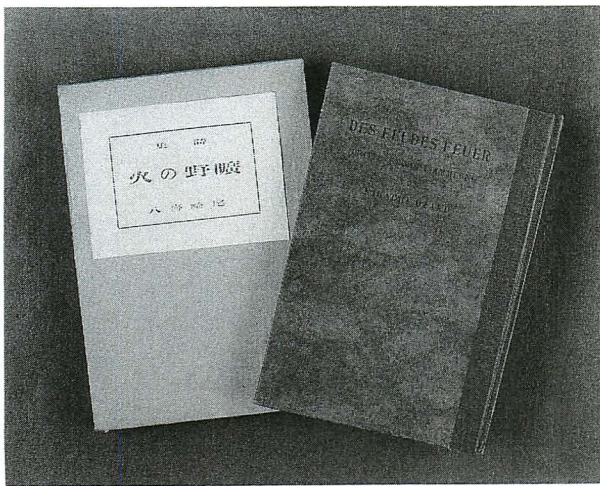
6 ロラン・ロラン 花の復活祭

昭和二年五月一日、叢文閣發行。一二二頁、定価一円二十銭。四六判、丸背、箱入。

7 曠野の火

昭和二年九月一日、素人社發行。四六判、角背、箱入。一一五頁、定価一円七十銭。

\*本文紙扉裏に「僕等のフォンテーヌブロー／なつかしい武蔵野での／互の友情と労作との記念に／今は亡い画家木村泰雄に」と四行にわけて記されている。前の二冊の詩集ではフランス語で書かれた表題が、この本ではドイツ語となっている。  
 DES FELDES FEUER DRITTE GEDICHTS  
 AMMLUNG VON KIHACHI OZAKI



此の詩集を世におくりながら、私の考へるのは、やっぱり自分の詩を愛してくれる既知未知の友の事である。此本を喜んでくれる其等の友の心を思ふと私の衷に勇氣が湧く。正しきを愛し、健全な美をたたへ、堅固な精神を護る此等の詩は、その主題が決して一箇人のものにとどまる筈がない。それは善き常識を具へた万人に属するものである。私の芸術は道理から出発して道理に帰るものだ。そして健全な人間は美に照らし出された道理を愛する。私は此の信仰から何時も自分の詩を書いたし、今後も同じやうに書くだらう。しかしこの信仰が間違つてゐると云ふならば、道理や美は私の芸術を罰するがいい。「本質的な人間にとつて真のお祭は業だ」とゲーテは云つた。詩を書くことは私の生甲斐ある業の一つである。私の生活は仕事によつて祝はれる。そして此の仕事がやがて必ず何かになるのだと思へば、真に聴かれる我が声の為に、十年や二十年待つたとて何でもない。『曠野の火』

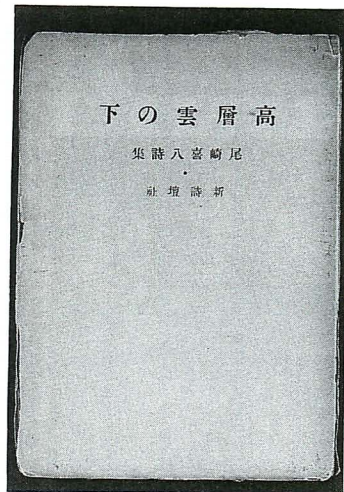
「自序」より

大正12年～昭和2年



者著るけ於に場事仕

芸術上、自分の気質の稍鮮明に生きて来たことを感じてよろこぶ。気質は生活をつくり、生活は詩を生かす。私の志すところは魂の平和と心の善良と、且つ精神の自由とを通して、みづから其れと確信する此世の美を表現するにある。それによつて人々との精神的結合を生むことにある。おのれに適さない事柄は一切他人に任せる。しかも此の道で——自分にとっては唯一の正道であると信じ切ることのできる道で——幾分なりとも地歩を進めたと感じ得るのは満足である。（『高層雲の下』「序言」より）



8 ヴィルドラック選詩集  
 昭和三年三月十日、詩集社発行。四六判、フランス装。一二七頁、定価一円。川島理一郎装幀。  
 \*「日本詩人叢書」の第一篇として発行されたもの。

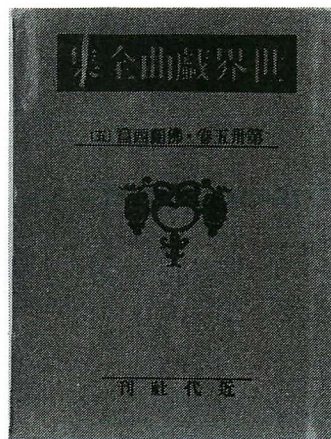
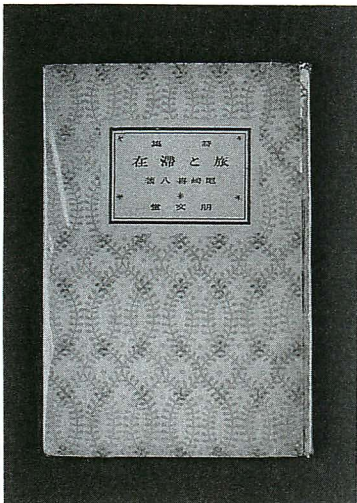
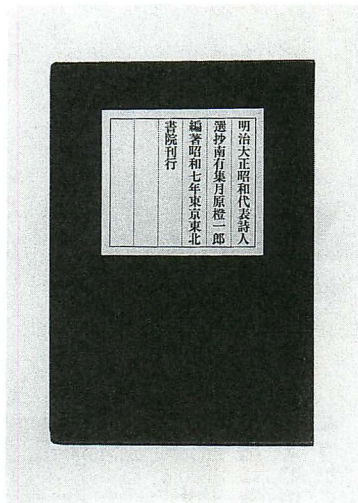
9 世界戯曲全集 第卅五卷・佛蘭西篇(五) 佛蘭西現代劇集  
 昭和三年一月十五日、近代社発行。四六判、丸背箱入。七六五頁、非売品(分買不可)。デュアメル作「光」(La Lumière 四幕)、喜八が訳出。六七三頁から七四一頁にわたる。

10 尾崎喜八個人雑誌 自由漁夫  
 昭和四年七月一日発行。菊判、八頁、定価十銭。(神奈川近代文学館中西悟堂文庫收藏)

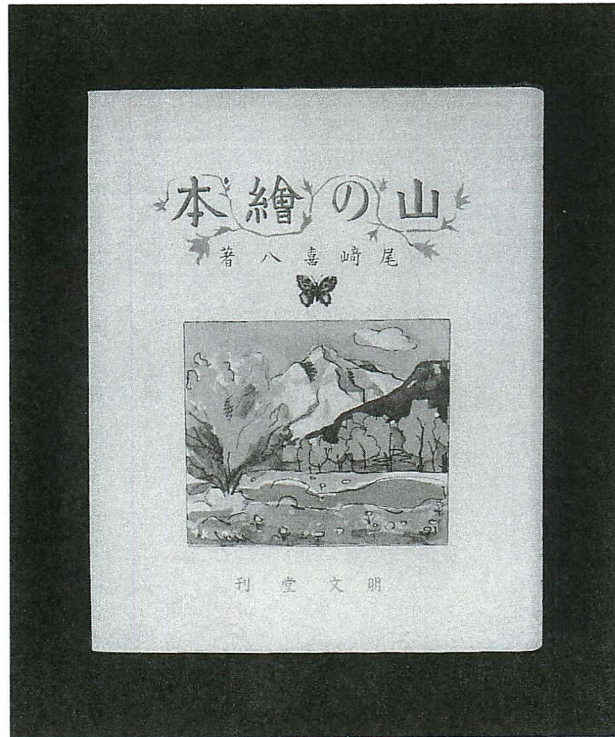
11 明治大正昭和詩人選「南有集」  
 昭和七年九月一日、東北書院発行。菊判、角背、九七頁、定価二円。和紙二色刷。限定二五〇部。  
 \*月原澄一郎編になる詞華集、て朔太郎、犀星、光太郎、心平、八十、柳虹、惣之助、介春、白秋など三十名。喜八の作は一篇(九〇頁)の「新戦場」である。この喜八の作品が当局の忌諱にふれこの書は発禁となった。戦死した人間を素材としたものだが、一人の死者をうたっていて、リルケ的な感じのある、当時としては珍しい作風と思う。今から見ればどうしてこれが忌諱にふれたかと考えざるを得ないものだが「護国の鬼などとは呼ばないでくれ」といった風な言葉にひっかかるところがあったのかもしれない。

12 詩集 旅と滞在  
 昭和八年六月五日、朋文堂発行。角背、インゼル叢書を模した縦長変型。七八頁、定価七十銭。恩地孝四郎装幀。  
 \*扉に「敬愛する高村光太郎君に献ず」とある。

13 山の繪本  
 昭和十年七月二十五日、朋文堂発行。菊変型判、布装丸背、カバー。三四六頁、定価二円五十銭。







一人の人間の現在の力の十分の九は、これを他人から受けたものだと言ふゲエテの言葉が本当だとすれば(そして私はそれにまったく同感する者であるが)それならば、自分の現在の思想傾向を、自然及び生活へのおのづからなる詩的滲入の仕方を、私はかの仏蘭西の Abbaye の詩人らから学んだ。あの芸術と生活への、熱烈で純潔な青春の夢が花と咲いた Abbaye sans abbé (院長の無修道院) の故園から学んだ。Charles Vidrac からはその子供のやうに驚くべき好奇心と、ヴィオロンのやうに頭へる歌と、無私で健全な愛とを、Georges Duhamel からはその切々とした「心情の支配」の福音を、René Arcos からはそのガヴロオシユのやうな男らしさと、他人のための屈托と、涙の出るやうなゴオロワの笑とを。私はもつと名を挙げなければならぬだらうか。いや、もう沢山だ。私が自分のうちに意識されない萌芽として持つてゐたものを、これこそお前の枝や花だと云つて知らせて呉れた多くの人達、(その中には無論日本人もまじつてゐる) さういふ無数の人達の名を列挙したならば切りがあるまい。私は彼等の名をしつかりと抱いてゐる。(『山の繪本』「序にかへて」より)

\*「河田楨君にささぐ」の献辞が扉に記されている。この書物のカバーデザインは片山敏彦、そして本文の口絵には喜八にヘッセから贈られた「湖畔」と題する水彩画がある。本文中、武田久吉(十種)木暮理太郎(二種)野口未延(一種)著者尾崎喜八(七種)の撮影になる山や高原の風景写真が収められている。

#### 14 ジャヴエル 一登山家の思ひ出

昭和十二年八月二十日、竜星閣発行。四一一頁、定価三円。菊判、丸背布装、天金、和紙箱入。

\*「此の訳書を木暮理太郎先生に捧ぐ」の献辞あり。

#### 15 詩集 旅と滞在

昭和十三年五月二十日、朋文堂発行。丸背、文庫判。九四頁、定価五十銭。

\*昭和八年に出版せるものの増補普及版。初版の三十篇に新しく八篇の詩を加えている。

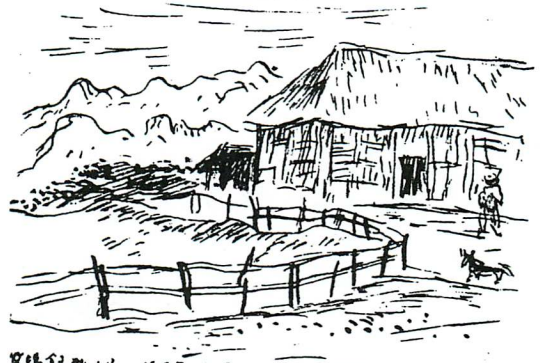
#### 16 雲と草原

昭和十三年七月二十日、朋文堂発行。菊判、丸背、二六六頁、定価一円六十銭。真垣武勝装幀。

\*「此書を妻に」の献辞が記されている。「山の繪本」もそうだが、この本はこうしたエッセイ風のものとしては多くの人に迎えられ版を重ねた。編者が買った昭和十八年のものは第四版で紙質も落ち、装本も粗末な厚紙のみの略装となった。その折の定価は二円四十銭とありそれに特別行為税相当額二十銭が付いて、合計二円六十銭だった。戦争で窮迫した世相が偲ばれる。



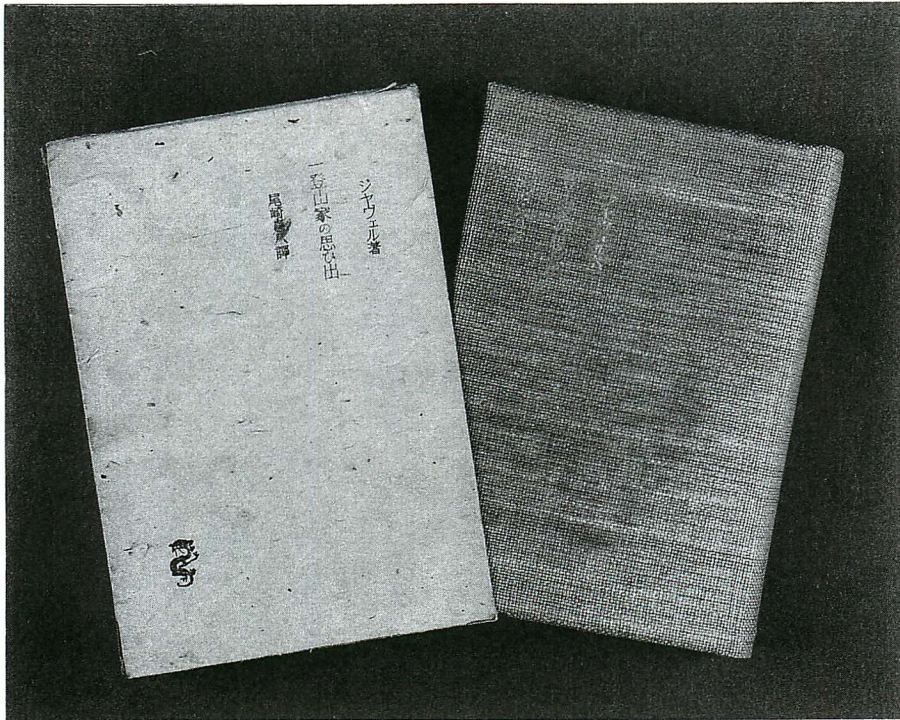
『雲と草原』第四版(昭和18年)の表紙イラスト  
真垣武勝・画。



『山の繪本』第三版・普及版(昭和18年)の表紙イラスト  
真垣武勝・画。

自分で書くのも変だが、此の詩集のうちの二篇の仏訳を読んで、老ロマン・ロランは「それは君の魂の現状を私に開いて見せた。一つは優美で淋しく、もう一つは心の気高い悲痛な悩みを現してゐる」といふ親切な言葉を寄せてくれた。ヴィルドラックからも、マルティネからも、同じやうな親しい感想を貰った。そしてあの逞ましい南部のジャン・ジオノは、「君の詩、それはまるで藤の房のやうだ!」と云つて寄越したが、私はそれに答へる最近の詩の中に斯う書いた——「あ、藤の房! 五月の青空と平原のまつしろな大きな積雲! / 僕は日毎あたらしく其の房を孤独の庭へ懸けてゐるが、/ 今日未だ知られないし、明日はもう遅いだらう。」そしてこれが現在の私の偽りのない気持である。(『旅と滞在』増補版のあとがき)より)

昭和12年～13年



Souvenirs d'Un Alpiniste. この本をはじめて手にして  
 から、すでに早くも七年の歳月がながれた。これを贈つ  
 てくれた人の手で「五年仲秋」と本の扉のところに書い  
 てある文字が、いま、翻訳ををはつて、ほつと息をつい  
 てゐる私に、いろんなことをおもひださせる。さうして  
 そのひとつとつが、この爽やかな立秋の日の田園では、  
 竜胆りんごいろの薄青い空からしんみり降りそそいでくる金い  
 ろの日光や、さらさらともろこしの葉を鳴らす風のなか  
 で、いづれも深い沈思と佇立とにあたひするものばかり  
 だ。ほんのり温い芝草をさがして、そこへ仰向けに身を  
 たふして、さうした思ひ出の鎖を繰つてみたら、どんな  
 にいいだらうといふ気がする。しかし、いま、それを数  
 へ上げて、人に話してみたいといふ気持もないし、又こ  
 れはそんな場合でもない。ただ、私自身、どんなちひさ  
 な幸福でも拾ひあげて、それを大事に思つて、どうやら  
 人らしく生きてはゐるものの、心の地平線のはるかかと  
 ころには、いつもいつも、何か知らないが悲しい晴朗な  
 郷愁のやうなものがあつて、それが私の物の考え方や行  
 動に、——また芸術の仕事に、——たうてい口では言へ  
 ないやうな或る匂とか、色あひとかを与へてゐることは  
 事実だ。さうして、それが、ジャヴエルといふ、かつて  
 此世にゐた人間にも、どこか通じるところがあるやうに  
 思はれるのだ。（『一登山家の思ひ出』「アルプスのオル  
 フォイス」と題する後記より）

## 17 ヘッセ ワンデルング

昭和十四年四月十日、朋文堂発行。四六判、丸背、カバ、一二〇頁、定価一円二十銭。  
\*本文扉に、「此の訳書を親しき井田清君に」の献辞。カバ、別紙扉、及び本文中に四葉のヘッセの水彩画を収める。

## 18 デュアメル 北方の歌

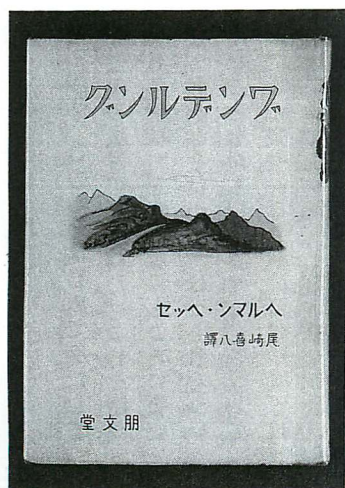
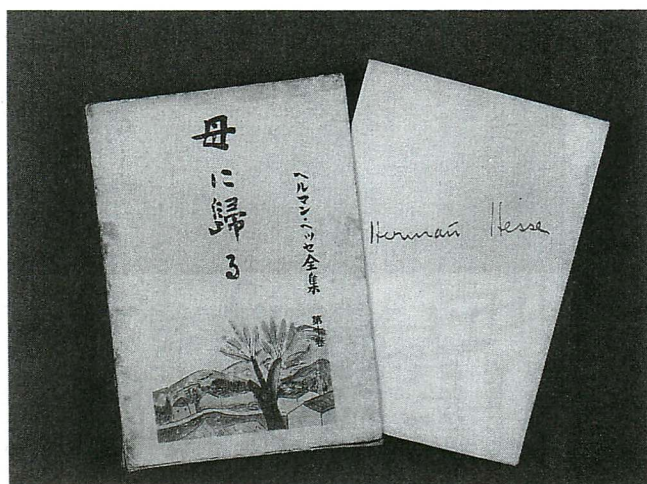
昭和十五年三月二十日、竜星閣発行。菊判、九四頁、定価二円五十銭。本文鳥ノ子、角背、箱入。

## 19 ヘルマン・ヘッセ全集(十) 母に歸る

昭和十五年八月十日、三笠書房発行。四六判、二八〇頁、定価一円五十銭。並製、箱入。  
\*ヘッセ全集十六巻中の第十巻で内容は「メールヘン」と「ワンデルング」。時局から他の巻もすべて日本的な題名をかかげている。

## 20 詩集 行人の歌

昭和十五年十二月二十日、竜星閣発行。菊判、二〇四頁、定価三円。(限定五〇〇部) 程村紙角背、本文特渡鳥ノ子、帙箱入。  
\*巻末に木々を背にした上高井戸の家の写真。本文扉に三行二聯からなるヴィルドラックの詩がかかれ、次頁に「これらの日の記念をわが児・栄子に」の献辞がある。



その一卷をなす絵と散文と詩が、悉く同一人の手になつた此の「ワンデルング」は、とりも直さず詩人ヘルマン・ヘッセの人生行旅のフリエーションであるとは云へないだらうか。私はこの小さい詩文集を或る人々の見るやうに単に彼の生涯の一時期の体験の記録、さすらひの旅日記のやうには考へない。(中略) 此本を大戦後の世界不安と家庭生活の重圧から免れ出た一漂泊者の手記としてばかり考へず、更に見地を高くして、これをひとつの表象として理解したならば、吾々はここにヘッセそのものの胴体トルソを見ることが出来るだらう。実際「ワンデルング」は無限に膨脹する可能性をもつた一箇の美しい球体であつて、それ自身直ちにヘルマン・ヘッセの意味である。(「訳者附記(ワンデルングに就いて)」より)



デュアメルがその作品で人を魅する力には幾つかの要素があるにしても、彼の文学の持つ最も深い味はひは、人間根本の哀愁と、それにも拘らず人生への信頼にすがりつかうとして思はず人の心をまで顛はせて来る其の歌の質にあると私は思ふ。それは一挙にしてわれわれを奮起させたり改宗させたりはしないが、早春の大地を柔かく濡らす雨のやうに、真珠いろに明るく細く降りながら、おもむろに人の心に滲み入つて養ふ。それは思はぬ空に夕べ早くもまたたいて、此の世のたそがれを誰よりも晩く家路に帰る人の眼のために、遙かに慰めの合図をおくる星の光である。この雨や星の光を柔かくうけとるためには、われわれが、何の意味に於いてであれ独尊者たり、特権者たり、或ひは使徒たるの意識を持つことは妨げになるかも知れない。もしもわれわれにして人類といふ膠質の一粒子たる明確な意識と、力と、徳と、勤勉との自覚を持つならば、悠然として善意の雨に濡れ、八方地平の消息をもたらす風にわれわれの葉むらの耳を傾けよう。(角川文庫版『北方の歌』「後記」より)

## 21 デュアメル 阿蘭陀組曲

昭和十六年三月一日、竜星閣発行。四六判、一一六頁、定価二円五十銭。本文鳥ノ子、角背、箱入。

## 22 デュアメル モスコウの旅

昭和十六年六月二十日、竜星閣発行。四六判、二六七頁、定価一円六十銭。略装、和紙カバー。  
\*原著者肖像、及び訳者への書簡の写真あり。

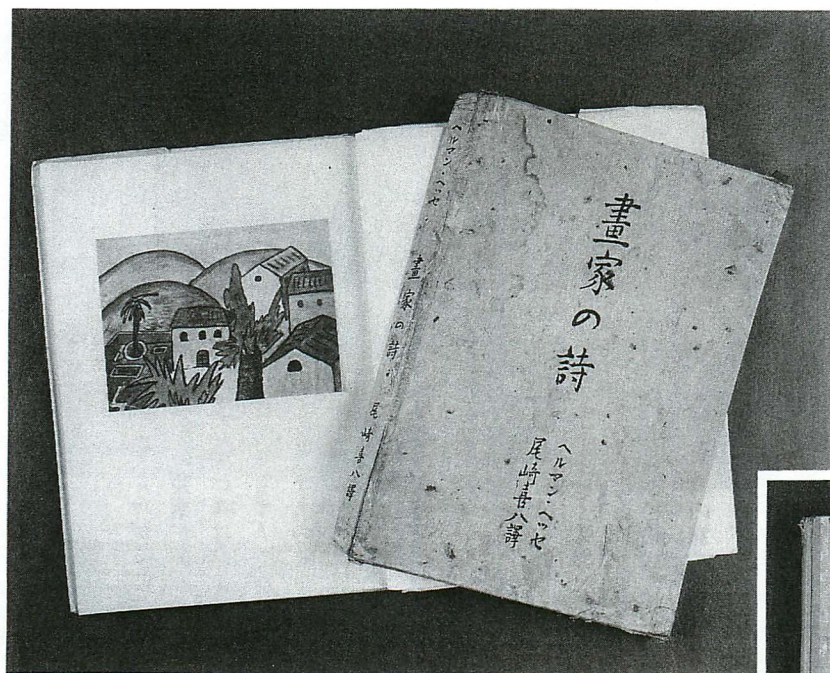
## 23 ヘッセ 畫家の詩

昭和十七年三月五日、三笠限定版倶楽部刊。B5判、角背、箱入。限定三五〇部、九八頁、定価七円。

\*ヘッセがスイスの書肆ベルトヴィラより出版した十篇の詩と十葉の水彩画に、ヘッセに捧げると記した喜八の文章「泉」「蝶」「早春の雨の夜」の三篇を附した。ヘッセの絵は別刷貼付。

## 24 雲

昭和十七年五月二十日、アルス発行。B6判、角背、背クローズ。一〇九頁、定価一円二十銭。(「アルス文化叢書」の(11))



昭和16年～17年



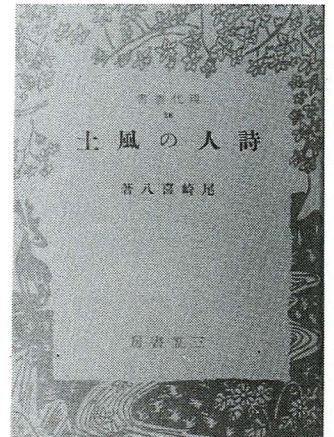
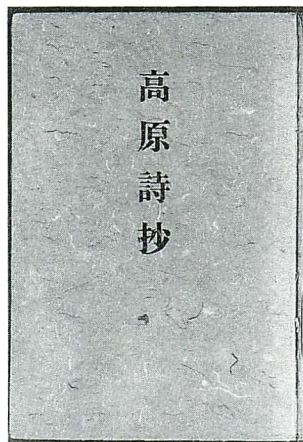
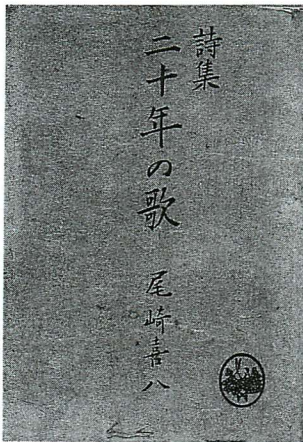
『雲』より。巻積雲、撮影・尾崎喜八

25 詩人の風土  
昭和十七年六月二十日、三笠書房発行。B 6判、丸背、カバー。二七〇頁、定価一円八十銭。(「現代叢書」の(28))

26 詩集 高原詩抄  
昭和十七年九月十日、青木書房発行。B 6判、丸背、一八三頁、定価二円。

27 詩集 此の糧  
昭和十七年十月十日、二見書房発行。A 5判、カバー、二一頁、定価二円三十銭。芹沢銈介装幀。  
\*既に紙質を云々するような時代ではなかったが、この本には二種あって、「上製本」の方は白いやや厚目の紙。それ以外のは黄味の強い薄いものを袋にして製本されている。共に再生紙であろうか、現在からみると隔世の感がある。外装は二種共変化なし。

28 詩集 二十年の歌  
昭和十八年二月二十日、三笠書房発行。B 6判、丸背、三二二頁、定価二円八十銭。



詩を書きはじめてから今年で二十三年目、最初の詩集が出てから満二十年になる。けふ五十一歳の静かに碧い空を仰ぎながら、此の二十年といふこしかたを心に多げれば、それが遠いとほい世の事のやうにも思はれるし、又つひ此のあひだのやうな気もするのである。

(中略)

此の詩集のために校正の筆をとりながら、ふと「Les beaux jours」といふ言葉が唇にのぼつた。なんといふ恵まれた恩寵の日々の連鎖が、私のために編まれたことだらう！なるほど人生は刻々と移つてとどまる時がない。「肉体と靈魂とは流のやうに流れて行く。歲月は老いたる樹々の肉のうちに記される」その私の年輪は蹉跌と悔、別離と出会、涙と歌とのひしめき合つた五十の輪の結集である。然しなんと私が愛されたらう、なんと幾たび救はれたらう！友に恵まれ、その時々 companion に恵まれ、常に誰かしらの献身の手で正しい道へ引戻された私。この大きな一生の負債を、私は自分の芸術、自分の行ひで返すのほかに無いのである。(『二十年の歌』「自序」より)





「いずれにもせよ、これらの作品はすべて此の大戦の第一年を通じて私から生れた私の詩だ。これらは善きにつけ悪きにつけ悉く私の本質の刻印を担つてゐる」と喜八はこの書の巻末に記したが、それから十七年後、この時期の作が含まれた詩文集第二巻「旅と滞在」の後記でそれにふれ、次のように書いている。

——「すべてが私の本質の刻印を担つている」と私は言った。今でも私はそれがそうだった事を否定しないし、今日の私の人間を知り、私の作品の底流をなしているものを知っている人々が、逆に当時にさかのぼつてこれらの詩を読むとして、それを善しとするしないうに拘らず、その言葉そのものに偽りの無い事だけは認めるだろう。こういう詩を書きながら、公表こそしなかつたが又別にまったく違った詩を書いていたなどは、私は言わない。私は本心を吐露して書いたのだから。そして私には本心が一つしか無かつたから。たとえその本心がかつての輝かしい普遍的人類愛の理想から墜落して、其処に私が生を享け、其処に生き甲斐と仕事の喜びとを受けている祖国へのみじめな忠誠、同胞への血縁的で盲目的な愛の衷情へと落ちこんで行つたとしても、それが常に無私のものだった事を私はひとめ、後になつて明らかにされたような事情に一切無知だった自分の愚かさを私は恥じるが、また他方天皇と祖国との名において命を捨て、命を失い、数年にわたる艱難をなめてそれに堪えた当時の同胞と、常にまごころをもつて結びついてきた事は今に及んでもなお私の慰めとするところである。私、及び私の詩に現れた人物は、どんな形であれ、戦争によつてうまい汁は吸わなかつた。後にも先にも！

## 29 詩集 組長詩篇

昭和十八年四月十日、大政翼賛会宣伝部発行。翼賛図書刊行会発売。B6判、略装、中綴。六六頁及あとがき五頁、定価二十銭。

\*この詩集には別に異った形の刊行がある。昭和十八年八月十日付で、この方は発行も前記翼賛図書刊行会となり、編集名義も下中弥三郎となつて民間からの出版物という形をとっている。この方は粗末ながらボール紙の表紙、角背で、いろは四十八文字を散らしたカバーがつけられている。定価は、税を含めて八十六銭。

## 30 詩集 同胞と共にあり

昭和十九年三月十五日、二見書房発行。B6判、略装。二二六頁、定価二円二十五銭。

## 31 麥刈の月

昭和二十一年四月十五日、生活社発行。B6判、三一頁、定価一円五十銭。(『日本叢書』の(50))

\*これは発行年月をみれば判るように敗戦直後の刊行物である。本文紙は茶っぽいざらざらの仙花紙、表紙とていくぶん白いものの粗悪な紙である。今の人には書物というよりパンフレットといった方が通りがいいだろう。しかし戦局がけわしくなるにつれて新刊書など殆どなく、その内容についても規制が厳しかったから、この赤色の子持ち野でかこんだだけの薄小冊子が戦後の飢えた心になんと新鮮に映ったことか。二段組、四篇のエッセイを収録。

## 32 ヴィルドラック選詩集

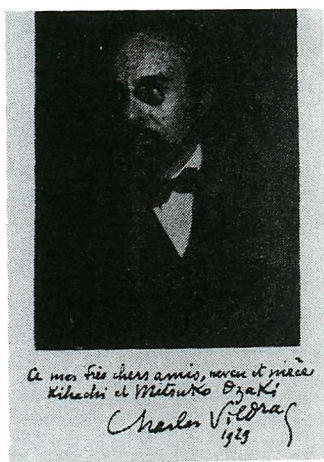
昭和二十一年九月三十日、寺本書房発行。B6判、略装、一八八頁、定価十五円。

\*昭和三年に発行せるものの改訂増補版。

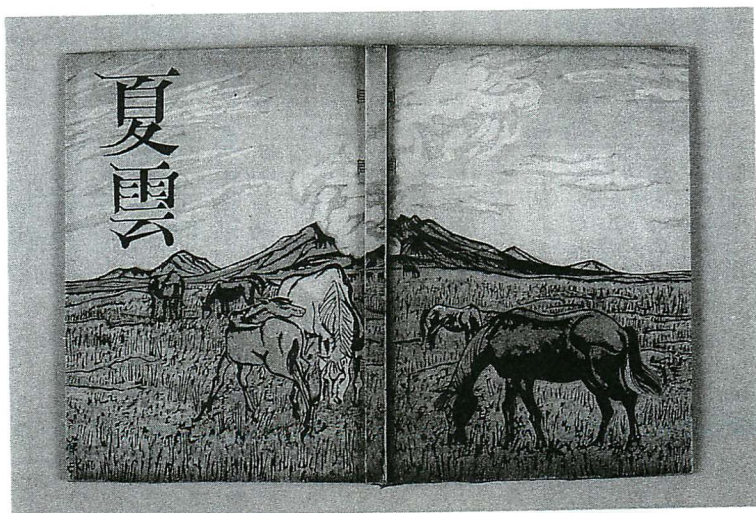
## 33 詩集 夏雲

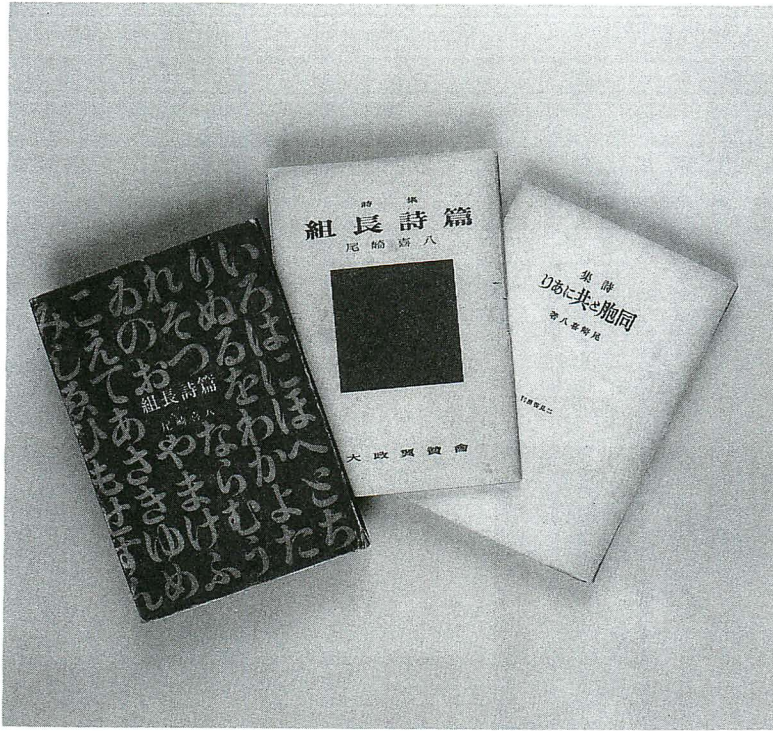
昭和二十一年十月五日、青園荘発行。本文二六頁、

\*和紙に黄色で「山と村落」の風景を木版で刷り、その上に活字を印刷したもの。扉及び表紙に使われた牧場風景もすべて関野準一郎の木版。一乗道



『ヴィルドラック選詩集』の巻頭写真。著者から尾崎夫妻へ贈られたサイン入りのポートレート(寺本書房版のみ)。





『ところで自然詩人尾崎氏には一方で、高村光太郎やヴェルアーランの影響もあって、働く人のたくましい美しさや、勤労のよろこびを歌ったきわめて人間臭い詩が少くない。『田舎の夕暮』『高層雲の下』『河口の船着』『蹄鉄打ち』などはその傑作であるが、これらの詩篇は世の民衆詩人たちの粗雑で鈍感な作品とはちがって、その造型も見事で、豊かなリズム感をもち、実に美しい。私は戦争協力詩として一部の人に批判されている戦時中の作品『此の糧』をも、この勤労詩のなかに加えたい。

私はこの名作が文学者愛国大会の席上で作者自身によって朗読されたとき、満堂の人々のあいだにまき起した深い感動を今でもはつきりと覚えているが、あの感動は、必死になつて戦争を闘っている国民大衆のその健気さに感動した作者自身の美しい感動が、そのままあの会場に集った人たちにまっすぐ伝わったからであつて、戦争讃美の詩などでは決してない。戦後これを再読した三好達治が「恐らくこの作が百年の後にまた新しく歴史的意義を加えて人々に興味深く読み返される日が到来するであろうと、おのずから想像をめぐらさざるをえなかつた」と書いているのは、よくこの詩の心を知る者の言葉であろう。『日本の詩歌』——詩人の肖像——と題する河盛好蔵の文章より）

明の刷りによる。そして製本はこの刊行者である内藤政勝が一冊ずつ、紐を通して手作りして仕上げたもの。一八〇部の限定版で非売品。内容は既刊のものより選ばれた詩十二篇である。

34 マアテルリンク 悦ばしき時  
昭和二十一年十月二十日、富岳本社発行。B6判、略装、一四三頁、定価十五円。



35 詩集 残花抄  
昭和二十三年一月十日、玄文社発行。文庫判、略装、一七一頁、定価四十五円。\*既刊のものよりの小型選集。二部に分け、その第一部には戦時中の作、第二部には限定版のため人手に行きわたらなかつた『行人の歌』より作品が選ばれている。



36 高原暦日  
昭和二十三年三月三十一日、あしかび書房発行。略装、B6判、一八〇頁、定価六十円。扉に「信濃を愛する人々に捧ぐ」の献辞。

もう白樺や胡桃の梢から黄いろい葉が散りはじめ、晴れた昼間をひろびろと初秋風の吹きわたる高原で、草の上に身をたふして大空を旅する雲を眺めながら、風と嵐との過去をおもふのが私には楽しい。人間窮局の成敗が棺を覆うて後定まるものだとするならば、生ある間のおのが救ひは風の日には楽しんで働き、嵐の夜には死力をつくして戦ふ事にある。ともかくも私は全力を傾けて生きて来た。その限りでは悔はない。今私の毎日は仕事によつて祝はれてゐる人生最後の秋である。太陽はゆつくりと午後の天を移つてゐる。土地は豊かで房も粒も重たくみゆる。とりいれの時は間近い。日光は熱を失つたがその光はいよいよ美しく暖かい。ますます大地が慕はしくなる。私は過去数十年に匹敵する力を此の幾年にそ、ぎつくさなければならぬ。〔『残花抄』「跋文」より〕



「高原曆日」は私をめぐる自然の記録を、詩人の心のしらべの中に編みこめた一聯のさやかな讃歌である。或日とつぜん裾野の青空に細まかな氷塊をならべたやうな雲がひろがる。塩尻峠の方向に輻射点を持つて南東にむかふ大規模な高積雲アルト・クムルスの発生である。思はざるに訪れた此の大気現象の希有な美観を、もちろん私も私の野帖へ詳細にわたつて記入する。然し其雲の形状、分量、色調、方向、速度などを記録しただけで私として足りるだらうか。否、その雲クラウドスケイプの氣象学的美観は同時に私の詩魂を動かして、四周の風景ランドスケイプとの独特な関聯調和の中にそれを捉へさせるのである。私は此の調和の美観をまるごと書かうと試みる。そして其処に私の此種の「文学」の発足がある。それは此の「高原曆日」や別著「美しき視野」を通じてまだ試作の域を出ないかも知れない。然しかういふ文学が何時かは我国の文学の中に独自で正当な領域を獲得するだらうといふ事は、私の固く信じて疑はないところである。(「序」より)

37 美しい視野  
昭和二十三年六月二十日、友文社発行。B6判、略装、三九一頁、定価百五十円。

38 ロマン・ロラン 花の復活祭  
昭和二十三年九月十日、あしかび書房発行。B6判、角背、一七〇頁、定価百二十円。

39 山の繪本  
昭和二十六年二月十五日、角川書店発行（角川文庫）三〇四頁、定価九十円。

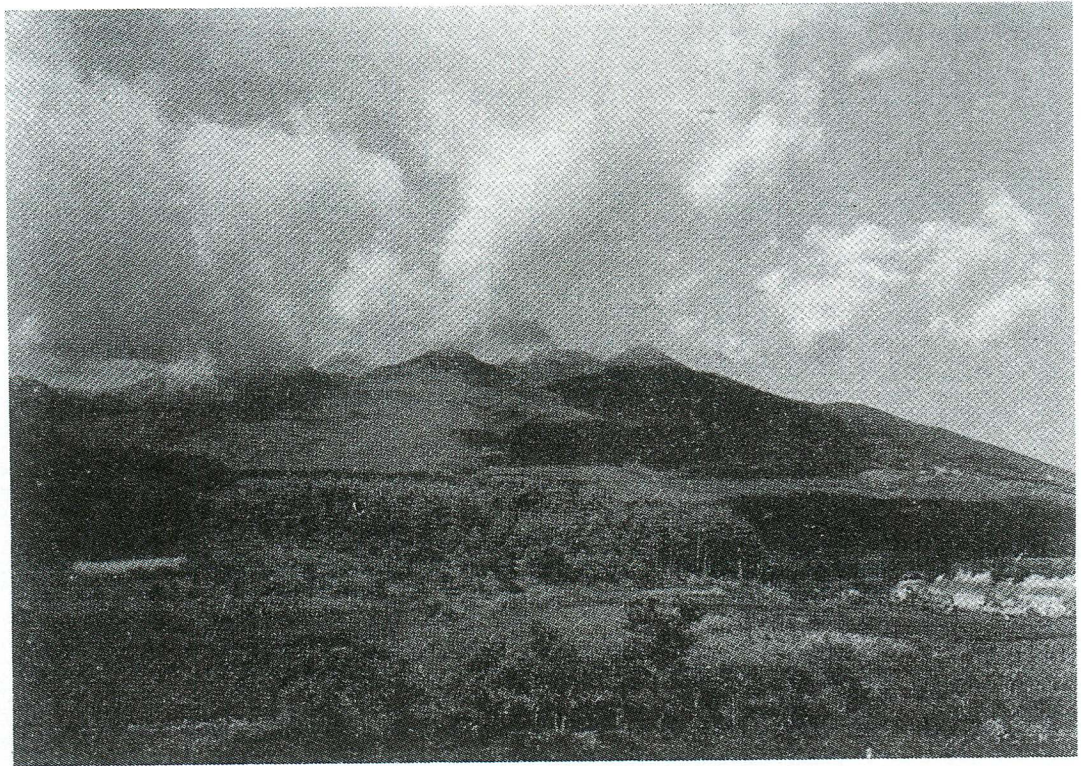
#### 40 碧い遠方

昭和二十六年九月十五日、角川書店発行。（角川文庫）二五〇頁、定価百円。

\*書き下ろしの作品集であるにもかかわらず、初めから文庫本で刊行されたというのは、この一冊のみである。始めこの本は当然S社から単行本として刊行される筈であった。まだS社に入ったばかりの若僧であった編者が立案したものを早速とりあげてくれたのは詩人エッセイストの宇佐見英治であった。彼はその編集長で、もともと英米文学の地味な出版だけを守っていた社の方針に満足せずフランス演劇や児童向けの書物に新風を盛りこもうとしていた。しかしまだ、当時の世の中は終戦後の急変の渦中であって、喜八本来の仕事を見ようとするよりも、たった今過ぎ去ったばかりの戦争に関するものにも少しでもふれまいとする、いわば傍目を気にする人々の方が多かった。はつきりいうなら戦争協力者とみられている人の本を出すことに積極的でなかったのである。そこへ出版界全体をおそったパニックがやってきて、若僧の私と、編集長というよりは文学青年であった宇佐見英治がどうやってみても実現は不可能となった。結局この書の後書にもあるように串田孫一氏が橋渡しとなり角川書店で、それも文庫という形で）ようやく陽の目を見たのである。そもそも種をまいた編者が、多数の応募者をおしのけてS社に入れたというのも串田氏の推挙があったからにちがいないから、串田氏は最初から最後まで



信州八ヶ岳の裾野で秋草の中に身を倒し、折柄の嵐のあとの西風に吹かれながら頭上にひろがる真青な空を見上げてみると、過ぐる幾年間の悪夢の記憶もその嵐と一緒に消えてゆく気がする。日を浴びて金色に光る一羽の鷹が悠々と高原の空を舞ってゐる。やがて雪の来る山々が漸く秋の色を帯びて来た。耳もとでは荒天のあとの平和な朝を再び信州の丘の蕎麦島へいそぐ勤勉な蜜蜂の羽音がひびく。その労働の讃歌が私のうちのベートルヴェンの歌にまじる、「われら人皆はすべて迷ふ、さあれ各々異なるさまに迷ふ……」願くば其の迷を繰返さざらん事を！ それでは私も立上らう。そしてもう一度生き直すのだ。（「自序」より）



『碧い遠方』の口絵写真・八ヶ岳（小林義郎・撮影）

『近代詩の年代にあらわれた人道的詩人の作品が生活的・具体的であり、そしてまた素樸であり直情的であったとすれば、喜八のそれはより精神的であり形而上的である。つまりこの詩人におけるヒューマニティは一つの精神的傾向としてあらわれ、そういう精神のいとなみにおいて作品は秩序づけられている。』

\*

『たとえば「言葉」という作品では、「私は言葉を「物」として選ばなくてはいならない」といい、さらに「それがいつでも百の経験の、ただひとつの要約でなくては」といっている。昔の詩人たちにこのような自覚はなかった。喜八が近代詩の延長されたコースをたどりながらも現代の詩人であり得たのは、一つにはこの自覚的立場にあるといつてよい。この「物」として把握された言葉は、ナマの感傷への傾斜を抑制する作用をし、言葉の意味と機能は綿密に把握される。』

もう一つ喜八が近代の詩人たちと異なるのは、その自覚的に把握された言葉を、キメのこまかい「物質」にみぎきあげたことである。喜八の作品はすべて自由詩である。日常口語を主にした自由詩である。この詩形はもうずっと昔から使い古されてなんの新味もないが、それを喜八は十分に生かしている。平明な詩形の落ち入りやすい単調さから身かわして、それにいきいきとした機能をあたえた。日常的な生活の岸辺に立つてその感慨を述べるこの詩人には、平明な詩風こそがもっともふさわしいものであった。特殊な詩形やデフォルメされた表現は、この詩人からは縁どおい。このことは喜八の詩的立場や人生的理念というべきものが、いつも健康であったことを語るようである。いづれにしるそのような平明な詩形に、この詩人は永い年月をかけて克明にみぎきをかけた。これは言葉のみがきとも密接に関聯するが、現代詩の世界において、自由詩形にもっとも安定感をあたえたのは喜八ではないか。いくたびとなくおこなわれた詩形の変革をくぐりぬけて、自由詩はこの詩人の手に、最も鞏固な詩形として生かされている。』（現代日本詩人全集第七巻所載・伊藤信吉解説より）

面倒をみたことになる。本当に申訳ないことをし  
たと思う。富士見て不如意の生活を送られていた  
詩人のつらさを想うと身の置き所なくその後しば  
らくの間、しきいが高くなった。詩人を再び訪れ  
たのは東京上野毛に移られて少し経た頃だった。  
\*文庫として出版の際、昭和二十三年に、信州上  
諏訪で出版された『高原暦日』を第一部に加えて  
いる。

#### 41 尾崎喜八詩集

昭和二十七年六月十五日、創元社発行。(創元文庫)  
二四三頁、定価百円。喜八のエッセイにしばしば  
登場する娘の栄子による編。巻末にはその栄子の  
手になる解説がある。

#### 42 ジャヴェル 一登山家の思ひ出

昭和二十七年十一月十五日、角川書店発行。(角川  
文庫)二八一頁、定価百円。

#### 43 デュアメル 阿蘭陀組曲・北方の歌

昭和二十八年五月三十一日、角川書店発行。(角川  
文庫)一一四頁、定価四十円。

#### 44 デュアメル わが庭の寓話

昭和二十八年六月三十日、創元社発行。B6判、  
二〇九頁、定価百九十円。

#### 45 尾崎喜八詩集

昭和二十八年七月十日、新潮社発行。(新潮文庫)  
一九一頁、定価八十円。著者自身の編。巻末に六  
頁にわたる三好達治の解説がある。

#### 46 千家元麿詩集(編著)

昭和二十八年十一月三十日、新潮社発行。(新潮文  
庫)二〇四頁、定価八十円。

#### 47 雲と草原

昭和二十八年十二月十五日、角川書店発行。(角川  
文庫)一九四頁、定価七十円。

\*内容は昭和十五年出版のものと変わらず。ただ文  
庫版のため、著者撮影の写真はない。巻頭に一葉  
川鳴利哉撮影のものが新しく加えられている。

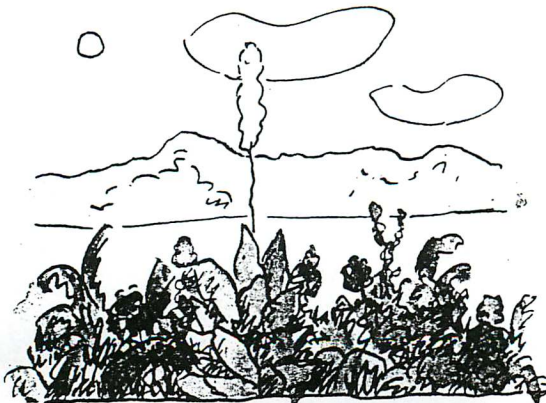
#### 48 全詩集大成 現代日本詩人全集(7)

昭和二十九年三月二十日、創元社発行。A5判、  
丸背、箱入。四四二頁、定価四百五十円。宮沢賢  
治、中勘助、釈超空とともに収載。喜八の詩篇は  
一八二頁より三三二頁にわたる。解説は伊藤信吉。

#### 49 ヘッセ さすらいの記

昭和二十九年四月三十日、三笠書房発行。B6判、  
略装、カバー、二〇二頁、定価百五十円。

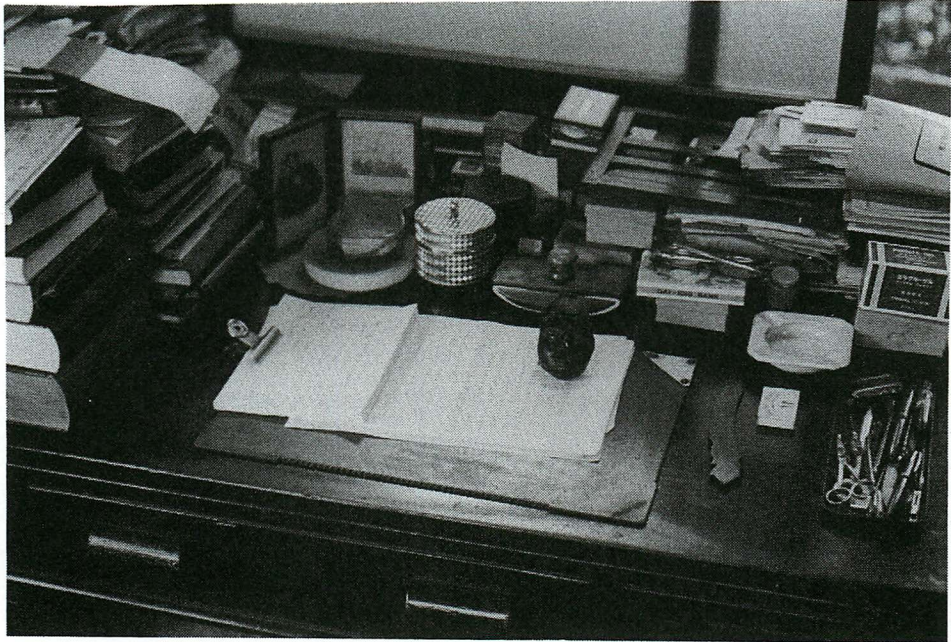
\*既に訳出した「ワンドルング」に「童話」(メー  
ルヒエン)七篇を加えたもの。カバーにのみヘッ  
セの絵を使用、本文中にはなし。



カバーに使われた  
ヘッセの水彩画







昭和 30 年代の喜八の机(「挿花」編集部・撮影。下の『喜八詩集』には収録されていない)

……彼には整理整頓と指物師のやうな寸法ど  
り内ノリ外ノリの尊重がある。ともすればそ  
れは一種の雄弁法めいて聞えない限りでもな  
いくらゐにまで彼はその手法メリハリを重ん  
ずる。従つてそれだけでも一面既にそれは確  
かに「口語自由詩」の見事な完成度を示すも  
のであつた。とともに、彼にはまた欧文和訳  
調の委曲を尽すに耐へた巧みな駆使があつて、  
それがハイカラでもあり新鮮でもあつただけ  
それだけ、所謂「口語自由詩」の従来のしき  
たりの語彙法語脈の外にも十分にはみ出して  
ゐた。「口語自由詩」の親近性は彼によつて十  
分に活用され、同時にそのシツペがへし口的  
気も半面また十分に活用された如くである。  
先の雄弁法めいた詩法とこの両活用形との組  
合せは、彼のユニークな存在理由であり、新  
機軸でもあり、またいくぶんの挑戦的意識を  
もそこに寓して彼の手中に弄ばれた——とい  
つて悪ければ彼は静かに退いてそれによつて  
彼自身を推し上げ鍛錬したと見ていい。(『尾  
崎喜八詩集』三好達治・解説より)

## 50 詩集 花咲ける孤獨

昭和三十年二月十日、三笠書房発行。B 6判、角背、箱入。一八二頁、定価二百五十円。(限定一五〇〇部)

\*オレンジ色の表紙には Solitude en Fleur とフランス語で黒く記されその下に空押しして Poemes とある。この詩集は喜八の詩集中最も秀れたものと編者は思う。恐らくこの高峰がなかったら喜八は近代詩人ではあり得ても現代へとながら喜八とはならなかったかも知れないとさえ思う。それにしてもこの詩集の題の何と意味ふかく美しいことか。いつの世でも詩人がその真価を呈示するとき、見えざるものに確乎として手をふれその名を明かすとき、必ず孤獨でなければならなかったし、他人の目にはどうであれその詩人にとってその孤獨こそ花咲けるものだったにちがいないから。

## 51 リルケ詩集

昭和三十年十二月十日、角川書店発行。B 6判、丸背、カバー、二七〇頁、定価三百二十円。

## 52 新譯ヘッセ詩集

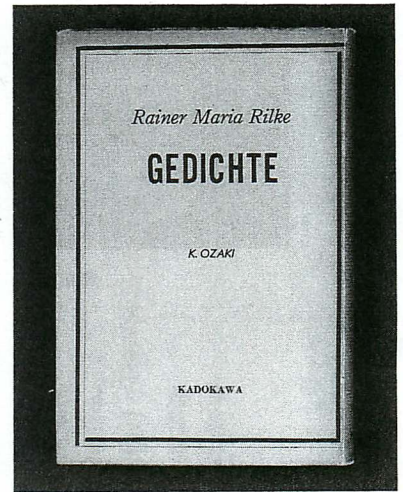
昭和三十年六月二十五日、三笠書房発行。A 5判、二六〇頁、定価二百五十円。布製丸背、ダンボール箱入。限定二〇〇〇部。

## 53 わが詩の流域

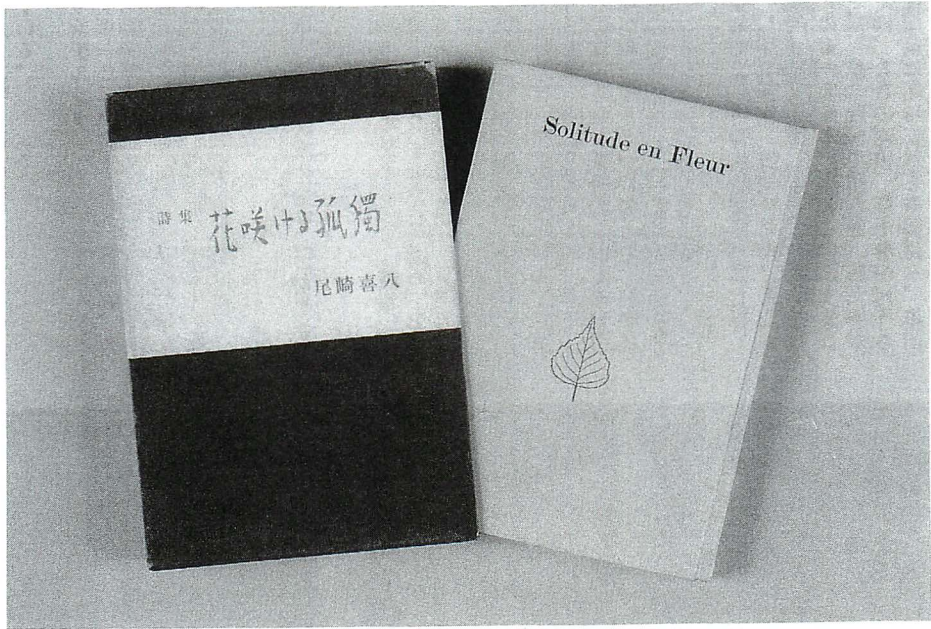
昭和三十年十一月二十五日、三笠書房発行。(三笠新書)新書判、カバー付。一九〇頁、定価百二十円。解説は山口耀久。カバーの絵は坂本直行の水彩画。

## 54 山の詩帖

昭和三十一年十一月一日、朋文堂発行。B 6判、カンバス装、角背、箱入。二六六頁、定価二百八十円。(「ユマクサ叢書」の③)



リルケを詩人の典型として敬ぶ者、実存者リルケの生涯の仕事に人間苦克服の鍵を見いださうとする者、リルケの泉から汲んでおのれ自身を養ふ者、さてはその独特な詩美に魅惑しつくされてリルケならではの夜も日も明けない者。これらさまざま種類の傾倒者を、とかくの批難や嘲笑の声にも拘らず、私はほとんど是認し、その各にそれぞれの理由があると思つてゐる。私にも亦リルケからほぼ同様な経験をした幾つかの時代があつたから。そしてそれが私にとつてプラスにこそなれ、決してマイナスとはならなかつたから。思ふに人がその人間としての、また芸術家としての生成の途上で、真に魂を打ちこむ事のできる一人を持つといふ事は幸である。魂の傾倒が「運命」とさへなる時、それはその人の年輪のもつとも充実した強い部分を形づくる。しかもこの事は彼が彼本来の者であることを妨げはしない。リルケにとつてもロダン体験がそれだつた。そしてリルケはつひにリルケだつた。私はその意味で人々のリルケへの愛や敬慕に対して率直に同感することができると。(『リルケ詩集』「解説」より)



詩作には豊饒の年もあれば貧寒の年もある。詩興の波には満干の週期があつて、書けない時には幾カ月を通じてただの一篇も成すことができない。さういふ不作の時、私は今日散文集「美しき視野」や「碧い遠方」をなしてゐるものを書き、またヘッセ、リルケ、デュアメル等の作品を翻訳した。しかし帰る処はいつでも自分の詩である。その成敗は別として、私にとつて詩を書くこと以上により善い生存のプレテクストは無い。そして今ふたたび其の高潮に見舞はれてゐる気がする。（「巻末に」より）

55 ヘルマン・ヘッセ全集(第七卷)  
昭和三十三年六月十五日、三笠書房発行。B 6 変型、クロス角背、カバー。二五二頁、定価百八十円。三人の共訳で、喜八は「メールヒェン」の七篇を訳出している。

56 ヘッセ ワンデルング  
昭和三十三年十月一日、朋文堂発行。B 6 判、角背、一四二頁、定価二百八十円。

\*表紙別紙貼付と本文中に十三葉、ヘッセの水彩画を収める。昭和十四年版そのままではなく、訳文全てにわたって新しく手が加えられている。

57 山の繪本  
昭和三十三年十月三十日、新潮社発行。(新潮文庫) 三〇九頁、定価百円。

58 ヘルマン・ヘッセ全集(第十七卷)「詩集」

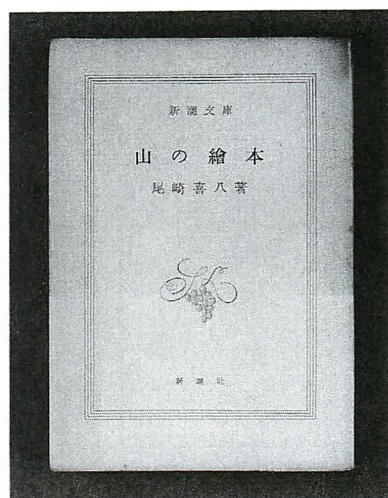
昭和三十三年十月二十五日、三笠書房発行。B 6 判変型、クロス角背、カバー。二二二頁、定価二百二十円。

59 詩集 歳月の歌

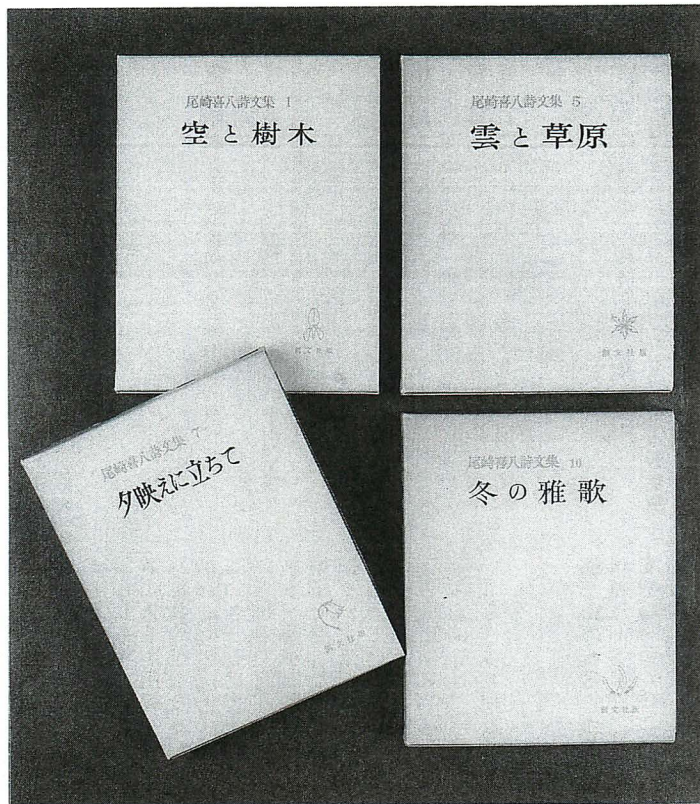
昭和三十三年十一月五日、朋文堂発行。A 5 変型、角背、箱入。二二七頁、定価三百八十円。

\*約半数が戦前の作。それに戦後のものと未刊の詩篇「木曾の歌」聯作などをつけ加えた。装幀は串田孫一。肌色の表紙に銀で Chants du temps qui S'écoule とフランス語で押しこめられている。

60 夕映えに立ちて(尾崎喜八詩文集・第七卷)  
昭和三十三年十二月十五日、創文社発行。A 5 変型、布角背、箱入。二五一頁、定価三百八十円。  
\*これは詩文集の第一回配本。当初この詩文集は全七巻として企画、後になって第八巻、第九巻が追加して刊行され、著者の死後、第十巻が刊行されている。責任編集は尾崎喜八と串田孫一。串田孫一装幀の各巻には三宅修撮影のもの、著者肖像があり、本文中には著者撮影のものを始め前記三宅他親しい人々の手になる風景写真が挿入されている。書中にはさみこまれた付録の葉には、各巻二



私という詩人の眼と心と足とをもつて深く親しんだ山や自然や人間の生活。そこに成り立つ内面的な交歓を書き残して置くことが一つの楽しい仕事だった。山旅の文章や自然の観察記や随想の形をとった一種の「我が心の物語」。私はそういう本をいくつか書いた。この「山の繪本」もその一つで、しかも最初のものであった。続いて「雲と草原」「詩人の風土」「美しき視野」「碧い遠方」。そして今もなお書き続けて新しい一巻を成そうとしている。世相の変転に眼を放ちながら、この片隅の楽しい仕事をしていると、おのれの生の夕日の傾くものにも気づかないほどである。みずから選んだ運命の星の下で、人間の樹木として六十年間、知らず知らず本然の樹形を形づくってきた。私は自分以外の樹になろうとはしなかった。この本はその最も古い枝で、昔の醜い瘤や傷痕を残しているが、まごう事ない私の一部。もはやいかんともなすがたい。(『山の繪本』新潮文庫版「自序」より)



本の題名「夕映えに立ちて」には、別に「野の復活祭」の初案があった。この本に自分の人間と詩業との復活の朝を想定して、ここを出発点に、地上最後の旅へ踏み出そうという気持ちからいえば捨てるに忍びない題ではあるが、またよく考えてみれば、この本を編む心には、ようやく傾く年齢の坂をくだりながら、ふと足をとどめて、しばし生涯の夕映えの風景に立ちつくしたいという深く切実な思いもあった。ここには私の善意や願望がある一方、抑制された憤りのあともあり、多少の美点の認められるものがあるにしても、又さまざまな欠点や未熟も露出している。そういう風物を残さずならべて、万象をひとしく聖別する夕空の光輝に浴させようというのが私の夢のイメージであった。今後自分を待つものが「われらと共に」とどまれ」のキャンタータか、「星空の下の夕べの歌」かは知らないが、今は若い頃から愛唱歌、シューベルトの「夕映えの中にて」Im Abendrot に万感を托すことにしたのである。（『夕映えに立ちて』「後記」より）

もしも私の傾向や欲望がいわゆる詩人の埒内にとどまっていたら、私はおそらく此の種の文章を書かなかったであろう。しかし私の衷の詩人の心は深く柔かく見入ることによって富まされようとし、浄化されることを願い、見られた者の中からその場限りでないものを、かりそめならぬものを、言わば神の徴候を見出そうとしたのである。私はそれが発見の機会であるが故にすべての会合と遭遇とをよろこんだ。好んで大道を行き、迂路をさまよひ、たたずんで身をかがめ、腕をひろげて眼を凝らすのが私の敬神の所作であった。私は見ることによって無数の未知から養われた。しかし知ることは私にとって神への最短の空路ではなく、それによって心情の領域のひろがる喜びに鼓舞されながら、いっそう孜々として努める地上遍歴の道であった。

（『雲と草原』「後記」より）

人の執筆者による文章がある。この巻は、朝比奈菊雄と山口耀久。この詩文集には毎巻、別に一〇〇部限定の特製本が作られた。総羊皮表紙、著者肉筆署名入、箱も和紙蓋箱特製である。

66 美しき視野 〔尾崎喜八詩文集・第六巻〕  
昭和三十四年八月三十日、創文社発行。A5変型、布角背、箱入。四〇〇頁、定価四八〇円。挿入の葉の執筆者、伊藤海彦と小林義郎。

61 雲と草原 〔尾崎喜八詩文集・第五巻〕  
昭和三十四年一月三十日、創文社発行。A5変型、布角背、箱入。三三〇頁、定価三百八十円。挿入の葉の執筆者は河田楨と石黒栄子。

67 花咲ける孤独 〔尾崎喜八詩文集・第三巻〕  
昭和三十四年十月十五日、創文社発行。A5変型、布角背、箱入。二四五頁、定価三百八十円。  
\*初期の企画であった全七巻の、これが最終配本。書中はさみこみの葉には夫人の尾崎実子、及び編者である串田孫一が執筆している。巻末には、喜八自身の手になる略年譜がある。作品の中にきれぎれの形では時折顔をのぞかせていたもの、はつきりと出生から少年時そして青年時へとこれだけ細かく記したものはない（この原型ともみられる、簡単な略年譜は創元社版「現代日本詩人全集第七巻」にある）。喜八はそのためにだけ過去を振りかえる、いわゆる思い出の文章を書くのをきらっていた。それは喜八らしい絶えず前方をみつめていようとする気質のせいだったろうが、この年譜でも中年以後は何年かをまとめて簡略にかかれていたし、昭和初期の他の詩人や文人とのことももう少し記してあったなら……と悔まれる。

62 空と樹木 〔尾崎喜八詩文集・第一巻〕  
昭和三十四年三月十五日、創文社発行。A5変型、布角背、箱入。三〇六頁、定価三百八十円。挿入の葉への執筆者は伊藤信吉と片山敏彦。

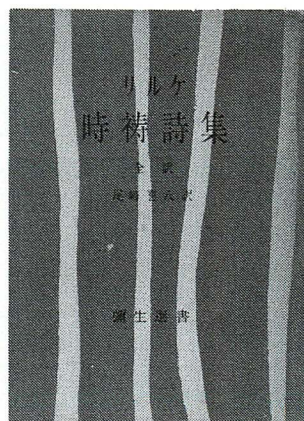
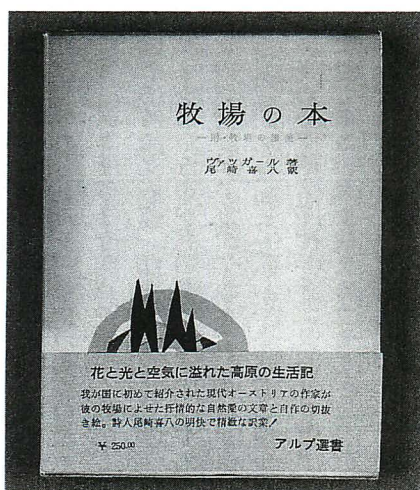
63 山の絵本 〔尾崎喜八詩文集・第四巻〕  
昭和三十四年五月六日、創文社発行。A5変型、布角背、箱入。三一二頁、定価三百八十円。書中には含まれた葉の執筆者は、藤木九三と川崎精雄。

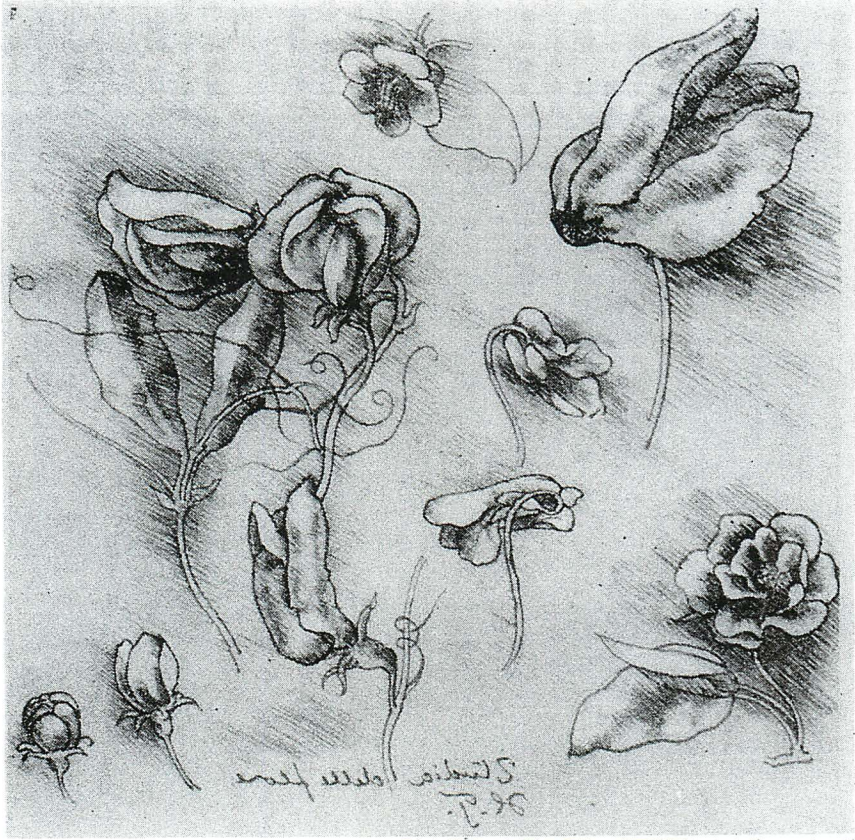
64 旅と滞在 〔尾崎喜八詩文集・第二巻〕  
昭和三十四年五月三十日、創文社発行。A5変型、布角背、箱入。二九二頁、定価三百八十円。書中はさみこみの葉の執筆者は、鳥見迅彦と山崎栄治である。

68 山のABC(共著)  
昭和三十四年十二月二十五日、創文社発行。A4変型、布角背、カバー、箱入。一二二頁、定価千二百円。写真と絵、散文と詩を織りなした本で喜八は八人の執筆者の一人。

65 リルケ 時禱詩集  
昭和三十四年五月三十一日、弥生書房発行。B6判、丸背、カバー。二四〇頁、定価二百九十円。

69 ヴァッガール 牧場の本  
昭和三十五年五月三十日、創文社発行。（「アルプ選書」）B6変型、角背、箱入。九八頁、定価二百五十円。  
\*著者切抜絵図版十六葉を収める。





『空と樹木』初版の扉絵、高田博厚によるドローイング

それにしても「詩聖」から「空と樹木」や「高層雲の下」につづく幾年、なんといふ多作を私がした事だらう。ユーゴーの「一行として書かざる日なし」を金科玉条に、高村千家両君のものや遠くエミール・ヴェルアール、ウォルト・ホイットマン等の作品に刺戟されて、いつのまにか身についた自分らしい語調抑揚を放縦に駆使しながら、見たもの感じたことを差別も無しに書いて行つた。自分の散文手法を解体して、そこから一篇の詩のやうな物をつくね上げる事が実にうれしかった。だから冗長を云々され、談理をうとまれ、果ては「何でも詩にするやつ」と罵られたのも今にして思へば無理もなかつた。ただ其の頃の取柄と言へば、自分の個性と衝動とに忠実だつた事と、志を貫く一念の強かつた事ぐらゐなものであらう。「現代詩人全集」はさみこみの栞に書かれた「第一詩集の頃」より）

——この詩文集後記でも当時をふりかえつて「手のつけようもないような愚作ぞろい」と書き、「生活力と創造慾とが旺盛で、実力これに伴わず、むしろ書くことを強行しながらおのれを推進して行つた一つの時代の、ごまかし得ない証拠物件だと言つたほうが当るかも知れない。」とつけて記している。

70 いたるところの歌(尾崎喜八詩文集・第八巻) 昭和三十七年七月二十五日、創文社発行。A5変型、布角背、箱入。二五八頁、定価五百円。八巻九巻は先にも記したごとく後に追加されたもので、挿入の葉はない。

\*この題も喜八は英語で思いうかんだようだ。ソングエヴリホエアだよと編者に言った。恐らく単行のものでしたら表紙に英語が記されることになったかもしれない。

71 山のABC 2(共著) 昭和三十七年十二月二十五日、創文社発行。A4変型、布角背、カバー、箱入。一二二頁、定価五百円。

72 高村光太郎詩集(編著) 昭和三十八年七月二十日、弥生書房発行。B6変型、角背、カバー。一五六頁、定価百八十円。「世界の詩」の(3)

\*喜八が詩人としての出発の時から敬愛し、その影響も大きかった光太郎の作品を編んだのは恐らくこれが初めてだろう。解説は巻末に六頁。

73 デュアメル わが庭の寓話・動物譚と植物誌 昭和三十八年九月十五日、創文社発行。A5変型判、角背、箱入、三一九頁、定価九百円。串田孫一カット・装幀。

\*別に羊皮表紙・天金・訳者署名入りの限定本一〇〇部・定価二千元を刊行。

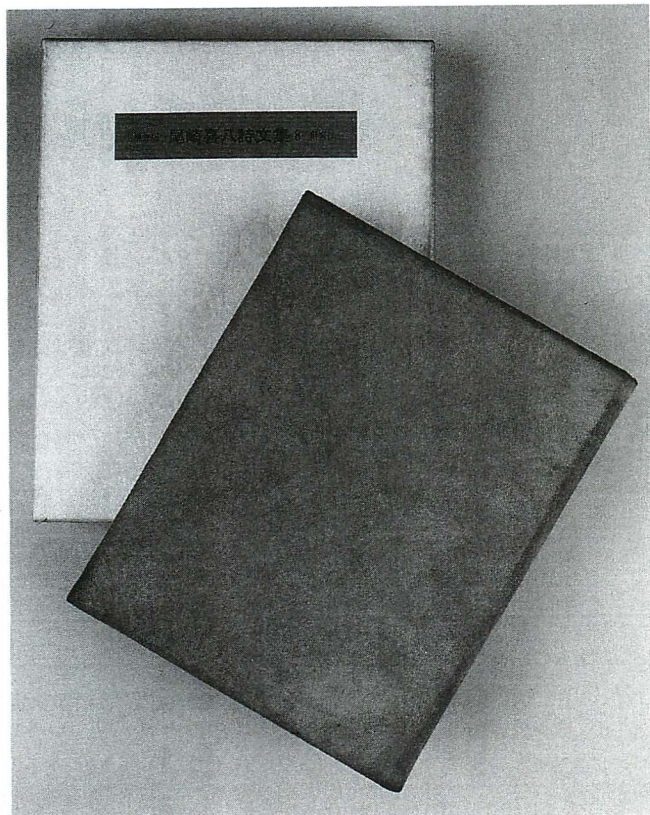
74 デュアメル 慰めの音楽 昭和三十八年十二月十日、白水社発行。B6判、丸背、箱入。二六三頁、定価五百円。

75 自然手帖(共著) 昭和三十九年三月十日、大和書房発行。新書判、カンバス装、角背、横綴。三二七頁、定価四百六十円。(「銀河選書」(5))

\*著者代表として書かれた喜八の「あとがき」にもあるように、これは「東京新聞」夕刊に昭和三十

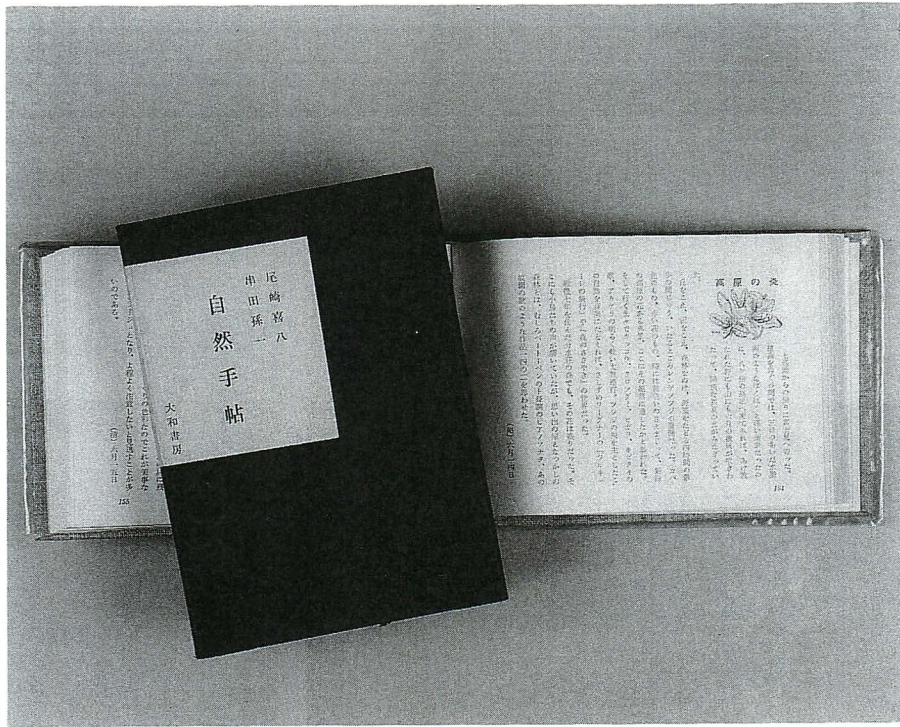
齡七十の坂道をくだりながら、肉体は古い、体力はいくらか衰えても、ついにこれという固疾もなく、精神と心とは私にあつてまだ若い。さして困難でない山ならばまだ登れるし、辞書を片手に難解な書を読む気力もある。昼間の仕事、夜の音楽にも、愛や根気や熱情の火は消えない。家族と身辺とに事さえなければ仕事はすなわち休息であり、閑暇もまた仕事への貯水池となつている。自流による発電と揚水の発電。出力は減つても効率は年齢以上の平均値を示しているようだ。そしてこう

いう状態がいつまで続くか知らないが、寿命や運命は神の意志に、毀譽褒貶は世間に任せ、光あるうちは光の中を歩まなければならぬと思つている。しかし心よ、けつして驕るな。そして思え、人間にはついに完成という時はなく、また独力ではその域に近づくことさえできないことを。先人や同時代者の薫陶・索引なくしては、今日のお前ですらあり得なかつたことを。人を慈しまぬ者は忘れられ、世を侮る者は見すてられ、自我に執する者は貧しい。(『いたるところの歌』「後記」より)



詩文集・特製本の「いたるところの歌」とその函





四百五十字たらずの各篇にそれぞれ挿画がついていて、いかにも贅沢らしく見えるこれらの短かい文章は、或いはいくらかの羨望を買いかも知れないが、そういう諸君にしても試みて出来ない事ではないのである。諸君の身のまわり、諸君の行くところ、一年を通じて自然の題材はいくらでもある。諸君は諸君の文章で、その見たもの感じたことを時に応じ物に即して、或いは素直に、或いは勁拔けいぱつに書かれるがいい。画がかければなおのこと結構である。そうして書き溜めたものは必ず何かになる。少くとも諸君の心の富にはなる。そうしてその富の蓄積が、諸君の永い人生航路の糧となるだろうことは疑いを容れない。

(『自然手帖』「あとがき」より)

十七年、一年間にわたって掲載されたものである。日曜をのぞく週六日を、六人の執筆者が分担し、それぞれの自然との交流や愛をつづったユニークな随想。喜八は一回分四百五十字程のこの形式を、窮屈に感じなかったどころか、むしろその凝縮させることに喜びを覚えていたようだ。それだけに出来上ったものの殆どは散文詩のような美しい文体と詩人ならではの叡知に溢れている。喜八後期の散文としては注目すべきものであろう。これはあとになって「一年の輝やき」と題され散文集『さまざまの泉』に収録、更に『尾崎喜八詩文集』第九巻『晩き木の実』に収められた。尚新聞掲載中の絵は牧野四子吉である。

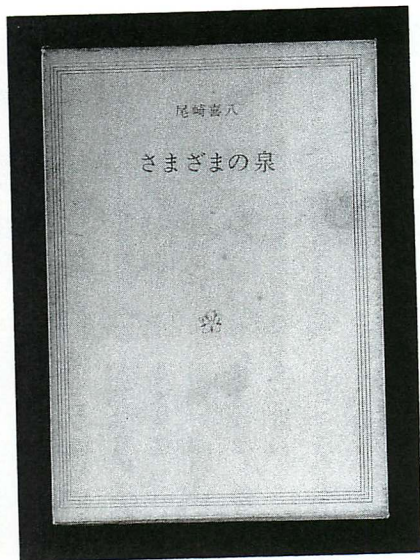
76 さまざまの泉  
昭和三十九年八月五日、白水社発行。B6判、角背、貼箱入。定価五百五十円。装幀・カット串田孫一。

77 ヘッセ 画と随想の本  
昭和三十九年九月二十五日、創文社発行。B5判、カンバス張、角背、箱入。一五四頁、定価千五百円。串田孫一装幀。別に、羊皮表紙・天金・訳者署名入・布装映入りの限定本一〇〇部・定価三千円を刊行。

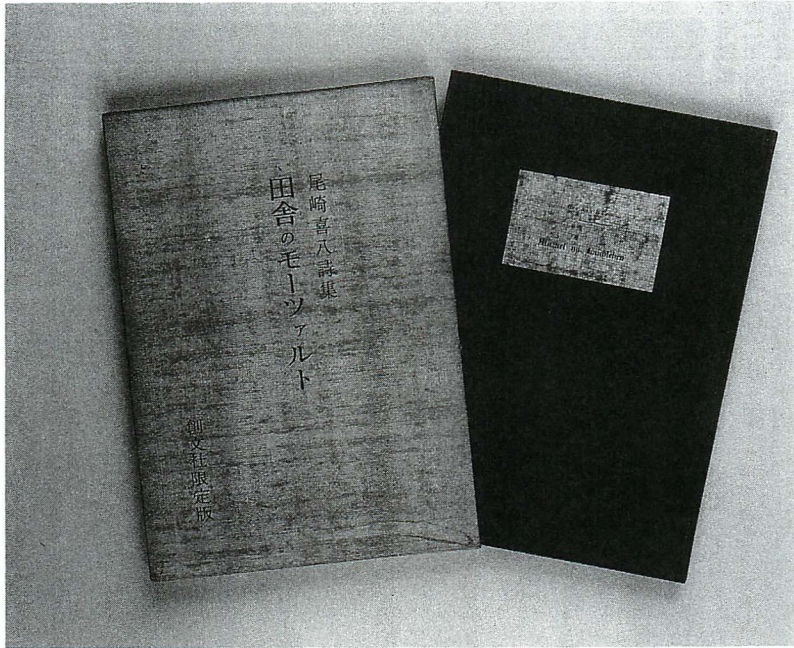
\*『画本』『テッシンの水彩画』『観照録』の三冊より選び出された十八篇の文章と八枚の水彩画が収められている。喜八の傾倒したヘッセはこの二年前の八月、八十五歳で他界している。

78 新訳ジャム詩集  
昭和四十年七月十五日、弥生書房発行。B6変型判、角背、カバー。一七三頁、定価三百円。(『世界の詩』の(21))  
\*この書の「後書」は一一頁にわたる書き下ろしである。

79 詩集 田舎のモーツァルト  
昭和四十一年一月二十日、創文社発行。B5判、布貼角背、箱入。八七頁、定価千五百円。限定五



ヘッセの水彩画(巻頭口絵)



私は多くの詩人が、その年齢を重ねるにつれて詩作から遠ざかり、詩を捨てる事実を常に遺憾なことだと思っている。もしも彼らにして精神の若さを失わず、心情の火を衰えさせず、体力もなお適度の作業に堪えるものを持つていたならば、その老境からはまた若年や成年の時には書けないような作品が生まれ得るものだと信じている。詩は人間の青春にだけ許された特権であり、その太陽は青春の時代の空にのみ南中するという考えはすでに古く、また幼稚な思いあがりでもあるだろう。真の詩人はそうした若い世代の勝ち誇った合唱の前にうなだれもしなければ、卑下もしない。なぜならば老境とは言え彼には彼の太陽があり、その正午の切実な南中と朝夕の親しい斜光とがあるからである。老いたる詩人はそこで歌い、そこで書く。そこには疾風怒濤の勢いに代わって、厚い暗い苔をやしない、針葉樹の森にひびく泉の歌がある。戦場の興奮、恋愛の陶酔に代わって、澄んだ諦念、晴れやかな叡智、彼自身なおその歯車の一環であるこの世への誠と愛とがある。そして老人を敬遠し或いは蔑視して片隅へ押しやる若い世代への、ねんごろな理解や警告すらもそこから生まれる。「死して成れよ」の信条に支えられるかぎり、詩人はその老いの変貌の中でいよいよ美しい。(『田舎のモーツァルト』「後記」より)

○〇部。串田孫一カット・装幀。  
\*別に羊皮表紙・天金・著者署名入・布装映入りの特製限定本一〇〇部・定価三千元を刊行。

### 80 ヘツセ詩集

昭和四十一年十二月三十一日、三笠書房発行。A5変型、丸背、箱入。二二三頁、定価五百八十円。  
\*装幀・カット串田孫一。

### 81 わたしの衆讃歌

昭和四十二年二月十五日、創文社発行。B6判、角背、箱入。二六八頁、定価六百五十円。カット・装幀串田孫一。他に特製本定価二千元。

### 82 ジャヴェル 一登山家の思い出

昭和四十二年二月二十八日、あかね書房発行。定価七百八十円、A5判、角背、箱入。(「世界山岳名著全集」(5))

\*三人の共著で、他の二種はマドウシユカ、ソニエ、である。ジャヴェルの部分は二段組一九一頁を占める。この版は現代かなづかいに改められている。後書には手を加えられ、原書を贈ってくれた人が、霧ヶ峯ヒュッテの長尾宏也氏であることが明らかにされている。

### 83 友へ贈る山の詩集

昭和四十二年二月二十八日、社会思想社発行。(「現代教養文庫」(591))二七八頁、定価二百四十円。串田孫一、鳥見迅彦の二人による編著。喜八の詩は一番数多く、八篇に収められている。

### 84 ヘツセ詩集

昭和四十二年四月十五日、三笠書房発行。B6変型、背皮丸背、箱入。二五六頁、定価三百八十円。口絵ヘツセ水彩画四葉。

\*「世界の名詩集」第一期全十巻の内、第十巻。

### 85 日本詩人全集(第二十二巻)

昭和四十二年十一月十日、新潮社発行。新書判、クロス角背、箱入。三三二頁、定価三百三十円。

(全三十四巻の内) 編纂委員は亀井勝一郎、河盛好藏、草野心平、中野重治、山本健吉。この巻は西脇順三郎と二人で一集を成す。「人と作品」及び「解説」は串田孫一、書中にはさまれる付録としての「菜に十七葉の写真と、喜八の生い立ちなどが記され、更科源藏の「四十余年の点描」なる文章がある。「読書案内」は伊藤海彦。

### 86 世界名詩集(9)「リルケ時禱集 薔薇」

昭和四十二年十一月十三日、平凡社発行。A5判、クロス丸背、箱入。二二三頁、定価六百円。喜八訳は時禱集の第一部「僧院生活の書」、五頁より八七頁まで。ちなみに第二部「巡礼の書」は富士川英郎訳。第三部「貧しさと死の書」は大山定一訳。「薔薇」は山崎英治訳。

### 87 さすらいの記

昭和四十二年十二月三十日、三笠書房発行。背革丸背、箱入。二二八頁、定価五百九十円。「ヘルマン・ヘツセ著作集」全十二巻の内。

### 88 自然との対話

昭和四十三年三月十日、文芸春秋発行。白井吉見、河盛好藏共編の「生活の本」(全十巻、四六変型、クロス丸背、カバー、箱入。三八八頁、定価四百八十円。別巻一)の第五巻。十五人の作品を集めていて収められた尾崎喜八作品は「井萩日記」(二五七―一八九頁)である。解説は串田孫一。

### 89 尾崎喜八詩集

昭和四十三年三月二十五日、弥生書房発行。B6変型、角背、カバー、箱入。一五七頁、定価三百円。(「世界の詩」(54)串田孫一による編著。巻末に六頁にわたる解説がある。

### 90 生活の中の美

昭和四十三年八月十日、文芸春秋発行。四六変型丸背、クロスカバー、箱入。三七六頁、定価四百八十円。白井・河盛共編「生活の本」(全十巻、別巻一)の第十巻。喜八の作品は「生活の中の音楽」。三二七頁より三四二頁に収載。解説は青柳瑞穂。

### 91 日本の詩歌(第十七巻)

昭和四十三年十二月十五日、中央公論社発行。(全三十巻、別巻一の内)B6判、丸背クロス、箱入。四一六頁、定価四百八十円。(編集委員、伊藤信吉、伊藤整、井上靖、山本健吉)

\*堀口大学、西条八十、村山槐多の三人と共に一集を成す。喜八作品は二九三頁より三八四頁まで。解説山室静。「詩人の肖像」として巻末に河盛好藏の平明なすぐれた小文がある。

### 92 自然手帖(共著)

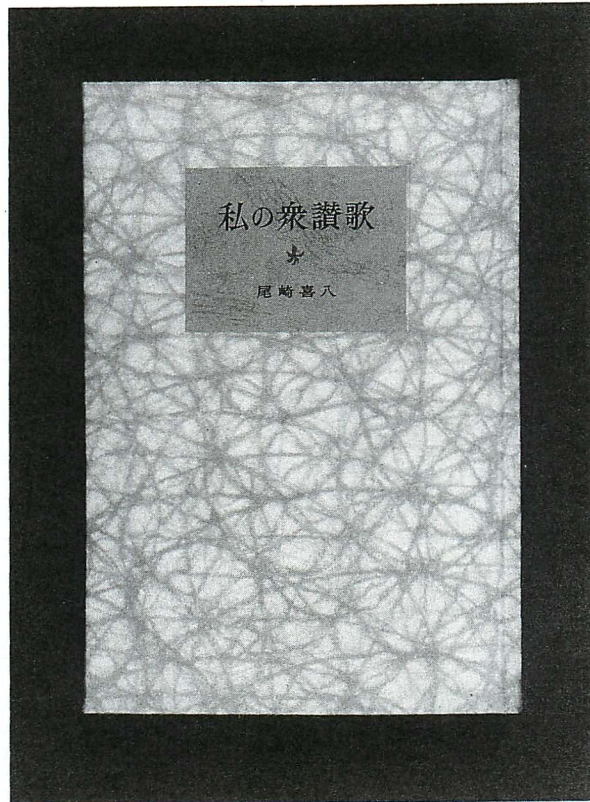
昭和四十三年十二月二十五日、雪華社発行。A5判、丸背、カバー。三二六頁、定価九百五十円。  
\*昭和三十九年出版のものと内容は変っていない。判型が大きくなり、串田孫一による改版に際しての文章が付けられている。

### 93 旅のこころ

昭和四十四年三月五日、主婦の友社発行。井上靖、白井吉見共編の「10冊の本」(7)。三九六頁、定価五百五十円。収められた喜八作品は「たてしな

### 94 美をたずねて

昭和四十四年四月五日、主婦の友社発行。井上、白井共編の「10冊の本」(8)。三九二頁、定価五百五十円。二一六頁に詩「日の暮」が収められている。この詩は「高層雲の下」に入っているもの。



私はこの暮に神奈川県鎌倉の新居へうつる。昭和二十七年の秋からまる十四年間を住みながら、いま蔵書の整理や身のまわりの物の始末や荷造をしている間にこの「後記」を書きながら、何かにつけて感慨のまことに深いものがある。(中略)「私の衆讃歌」と題したこの本も、こうした落ちつかない毎日の中で考えれば、これが連続した仕事の一つの結末、一つの句切りであるように思われる。私はこの家で八巻の詩文集を出し、それ以後数冊の自作や翻訳の本を出した。戦後七年間の信州富士見生活も自分としては多産だったと思うが、ここでの十四年間は押し移る老境と共になおいくらかの深さと成熟とを仕事に加え得たと信じている。そして私にとってこの本は、実にわが詩人生活の第三期を閉じるもの、恥ずかしなからその締めくくりをなすものである。(『私の衆讃歌』「後記」より)

## 95 タベの旋律

昭和四十四年六月二十日、創文社発行。B 6判、布角背、貼箱入。二五二頁、定価八百円。

\*装幀は串田孫一。別に特染バックスキン表紙・著者署名入りの限定本一〇〇部定価三千円を刊行。

## 96 人道主義の周辺

現代詩鑑賞講座(全12巻の(6))〈近代詩V〉昭和四十四年八月三十一日、角川書店発行。A 5判、丸背、箱入、四七一頁、定価六百七十円。喜八の詩篇は二四三頁より二七四頁。鑑賞として詩篇の解説を執筆しているのは鳥見迅彦。

## 97 自註 富士見高原詩集

昭和四十四年十一月三十日、青娥書房発行。A 5変型、一五三頁(目次別)、定価千四百円。限定一〇〇〇部。装幀串田孫一。他に特製版一〇〇部限定、定価三千五百円。

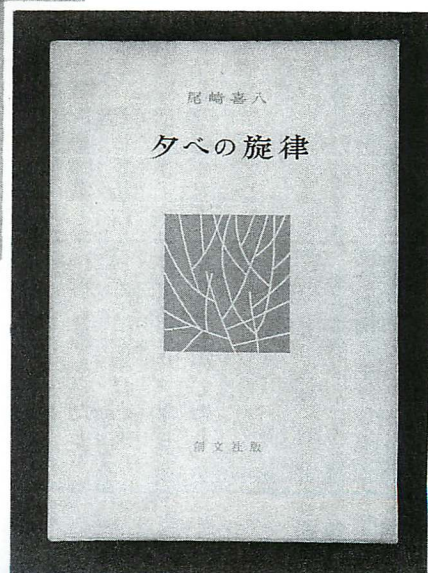
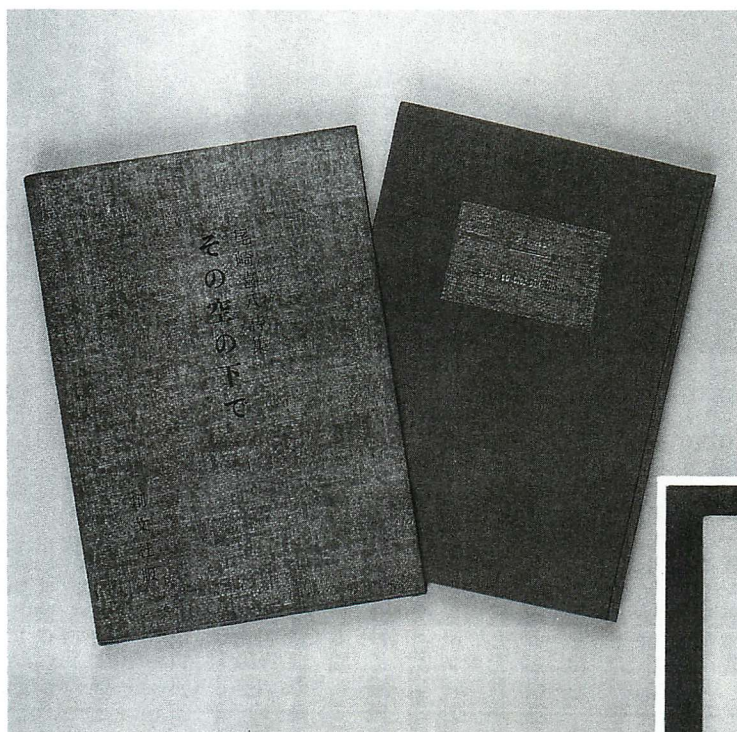
## 98 山のABC 3

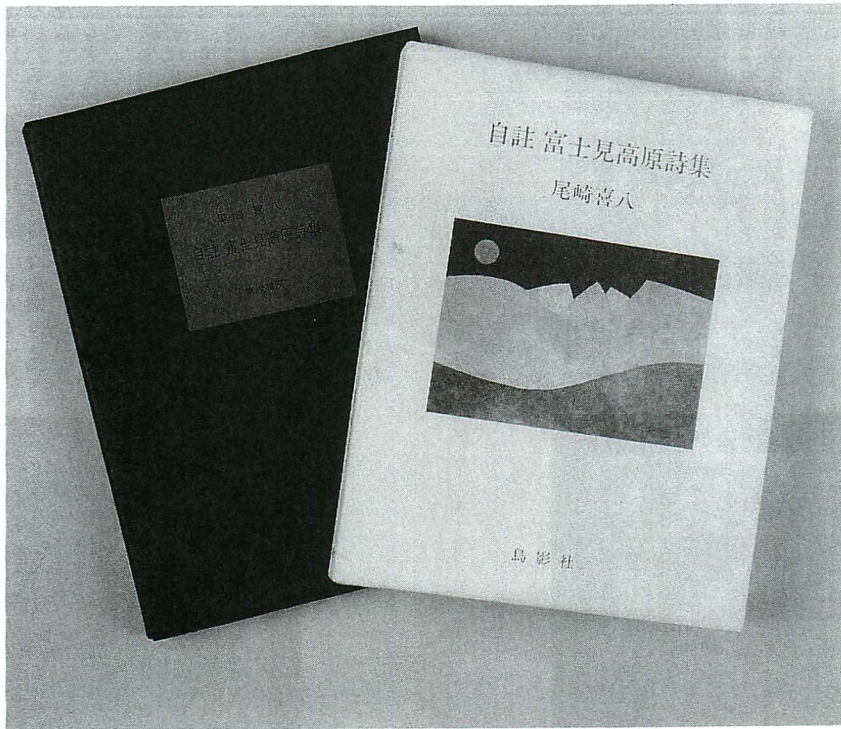
昭和四十四年十二月十五日、創文社発行。A 4変型、布角背、カバー、箱入。一二二頁、定価二千円。

## 99 詩集 その空の下で

昭和四十五年十二月十日、創文社発行。B 5判、布角背、貼箱入。九〇頁、定価千五百円。装幀カット串田孫一。別に羊皮表紙・天金・布装映入り・著者署名入りの特製限定本一〇〇部・定価五千円を刊行。

\*これは喜八にとって最後の詩集となった。あたくも詩人自身それを知ってでもいたかのように、十五篇もの詩が親しい人々に別れの挨拶のように贈られている。そして、最後の詩篇「沈みゆく星に寄せて」の最終聯は「しかしただ私は知っている、自分の星が／この空の奥底へとやがて永久に消え沈むのを。」という言葉で結ばれている。表題の「その空の下で」は表紙に *Sous ce ciel chahitable* と記されているが、それについて喜八は後記で次のように言っている。





『自註 富士見高原詩集』の新・旧版

詩は言葉と文字の芸術であると同時に作者の心の歌でもあるから、本来ならばその上更に解説その他を加える必要は無いはずである。しかし最近では色々とする選詩集の中に選者その人の鑑賞や、註釈や、或いは批判めいた物さえ添えられている場合が多くなった。それは又それで必ずしも悪くはないが、しかしそのために作者本人がいくらか困惑を感じる場合も絶無とは云えない。鑑賞や批判が原作者の本来の意図や気持と食い違ったり、註釈に誤りがあったりしたのでは、迷惑するのは作者ばかりか、心ある読者、鑑賞力の一層すぐれた読者の中には、その事に不満や不快を感じる人さえいるのである。現に私はそういう例を知っているので、今度は敢えて自註という新しい試みに手を染めた。会津八一氏にも「鹿鳴集」の立派な自註本があるが、詩集としてはこれが最初のものではないかと考えている。(『自註 富士見高原詩集』「あとがき」より)

「ちなみに詩集の題名について言えば、この本の中に出て来る或る作品の同じ題とはその扱って来るころ幾分異なっていて、ここでは私自身がお生きて愛している『懐かしいこの世の空の下』という意味である。」

——喜八はどういつも「生きる」ことに自身を充填した人も少ないだろう。これほど日々の隅々まで自分を拵げ込みませ、そのことの喜びで生かされたという人もそうないであろう。

### 100 あの中の私の山

昭和四十六年七月十二日、二見書房発行。B6判 クロス丸背、カバー。三〇二頁、定価五百五十円。既刊の六冊の散文集から選ばれた文章に、二冊の詩集からとられた詩六篇を加えたもの（「山岳名著シリーズ」の内）。

\*巻末に山口耀久の「尾崎喜八の山の文学」と題する六頁にわたる解説があり、はさみ込みの「月報」には伊藤海彦「尾崎喜八における自然」がある。

### 101 ヘッセ詩集

昭和四十六年七月二十日、三笠書房発行。四六判 角背、箱入。二五六頁、定価六百八十円。

### 102 素顔の鎌倉(共著)

昭和四十六年九月一日、実業の日本社発行。B6判、角背、箱入。三一九頁、定価八百八十円。共同執筆者は大仏次郎、富士川英郎、伊藤海彦。

\*村上光彦、三山進。喜八の文章の内一篇は「旅」に書かれた文章に筆を加えたもの。他の一篇は書き下ろし。後にこれは創文社版詩文集第九巻「晩き木の実」に収められている。題字は喜八の手によるもの。

### 103 晩き木の実(尾崎喜八詩文集・第九巻)

昭和四十七年六月二十日、創文社発行。A5変型 布角背、箱入。三二三頁、定価九百八十円。前にも記したように、八巻九巻には書中はさみこみの葉はない。



口絵に使われたヘッセの水彩画 (1952年1月ごろ)





「書齋にて最近の著者（1972年5月）」三宅修撮影

月日の経つのは速いもので、詩文集の第八巻『いたるところの歌』が出てから今年でもう十年になる。今度第九巻として纏めたこの本は、従ってその十年間の収穫である。私もあれから十年歳をとったから、思えば『晚き木の实』と言っても当らなくはない。

\*

東京が五年、鎌倉が五年。その後半の五年間に雑誌「芸術新潮」へ「音楽と求道」というのを今も毎月連載している。これは或いは私の最後の仕事になるかも知れないが、とにかくこの十年間というものを私はただ漫然とは生きなかつた。『晚き木の实』と、やがて出る一冊、『音楽と求道』、それに詩集。それになおほかの或る雑誌に連載中の翻訳と文章の本。齢満八十歳を迎えていまださして衰えぬこの心身の健やかさを、有難い事として私は神に感謝している。（「後記」より）

## 104 自然への希求

昭和四十七年七月二十日、文芸春秋発行。四六変型、丸背、カバー、箱入。三七六頁、定価六百円。「新編人生の本」全十二巻の第十巻。江藤淳、曾野綾子編、解説は開高健。喜八作品は「たてしなの歌」、五二頁より八八頁まで。

## 105 音楽への愛と感謝

昭和四十八年八月三十日、新潮社発行。B6判、丸背、カバー。三〇五頁、定価九百円。装幀串田孫一。

\*昭和四十三年から四十七年まで五年間にわたり「芸術新潮」に連載したもののほぼ四分の三の文章で編まれている。突然の胃からの吐血で入院した喜八の病床にこの書は美しく装われてやってきた喜八の最初の著書はこの年譜で示すように翻訳ではあるが、喜八が終生師と仰いだロランの「近代音楽評伝」(今日の音楽家)。そして最後の著書がこの「音楽への愛と感謝」である。(このあとに文庫に再録されたヘッセが出版されたが……)音楽に始まり、環のようにまた音楽によって閉じたこのふしぎさ。シュールベルトと誕生日が同じであることをいつも子供っぽく喜んでいた喜八にとって、正に終始一貫したというべきだろう。

## 106 ヘッセ さすらいの記、

昭和四十八年十二月十五日、講談社発行。(講談社文庫)一六七頁、定価百六十円。

\*ここ数年の流行で文庫版にもカバーが着けられている。そのカバーと口絵に二葉、色彩版でヘッセの絵。他、ヘッセの肖像写真二葉を巻頭に収め、本文中にはカット風に絵とヘッセのスナップを多数挿入している。内容は「ワンデルング」に「碧い遠方」と題して十八篇のエッセイを付したものの

性格や境遇の内にとどこか似たところがあつたせい、若し時からヘッセが好きで、彼の詩を読みたいばかりに独学でドイツ語を学んだ私は、その詩はもとより、小説作品の大部のものを読んで一つ一つ深い感銘をうけた。しかし詩も好きならば自然も好きだつた私にとっては、同じヘッセでも純粹に小説風の作品より自然の出でくる詩的で自由な随筆風のものが一層気に入った。そしてそういう気になつた。

入つたものを自分で訳してもつていたのがこの本の内容である。つまり私はこの本で自分の最も好きなヘッセの一面を日本風に磨き出したといつてもいいかも知れない。(『さすらいの記』「あとがき」より。昭和四十八年十一月二十五日の日付があり、喜八の最後に書いた三篇のうちの一つである。自著の『音楽への愛と感謝』につづいて、これが病床で手にした最後の本となつた。)





幼くして歌というものを教えられて以来、更に長じてロマン・ロランの書くものに親しんで以来、音楽は私から離れなかった。その美は私を喜ばせ、鼓舞し、慰め、また時に私を鞭撻しつつ精神を高揚させた。私の詩や文章、つまり今日までの私の仕事は、すべて音楽（それに自然）から養われたものだと言える。もしもこんな事が言えるのだったら、私は詩人としてジャン・クリストフでありたかった。音楽の美に装われながら文学の仕事に一生を捧げたかった。そしてその望みは、多少なりとも叶えられたように自分では思っている。

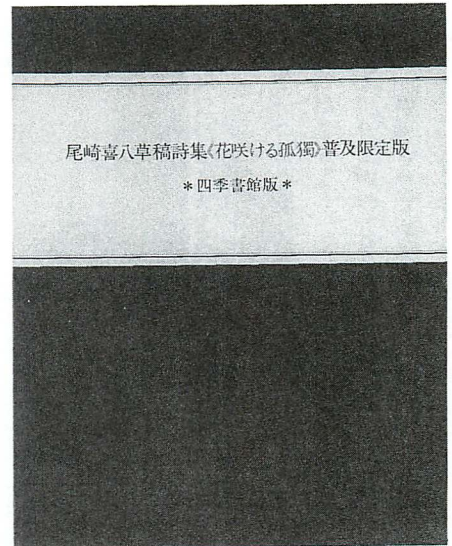
（『音楽への愛と感謝』「あとがき」より）

## 〈没後〉

107 冬の雅歌 〈尾崎喜八詩文集・第十巻〉  
昭和五十年三月十日、創文社発行。A5変型、布角背、箱入。二五八頁、定価千五百円。  
\*これまで詩文集は喜八自身の選択によるものだったが、この没後の最終巻は遺された作品から散文を串田孫一、詩を伊藤海彦が選んだ。

108 草稿詩集 花咲ける孤獨  
昭和五十年十二月十日、四季書館発行。A4変型、角背、箱入。一五〇〇部刊行の内二〇〇部は特製本。  
\*昭和三十年に出版された詩集の著者原稿をそのまま写真版としたもの。墨書の詩「冬野」、及び著者写真、串田孫一による「白樺の葉について」の文章が巻頭にある。巻末には初版本以降の二種の後記が再録されている。附録としてつけられた二四頁の別巻には鮎川信夫、田中清光、赤井淳一郎、尾崎実子、安川茂雄の文章と「歷程」からの転載の伊藤海彦編年譜がある。

109 デュアメル十尾崎喜八 わが庭の寓話  
昭和五十一年八月三十日、四季書館発行。A5判角背、箱入。二三〇頁、定価千八百円。  
\*デュアメルの文章によってもたらされた寓意やイメージに、喜八が短い文章で応じている。協奏ともいえる書。表紙にデュアメルの、裏表紙に喜



昭和50年～56年  
没後

八の庭での写真、見返しにはデュアメルからの手紙の文字が使われている。

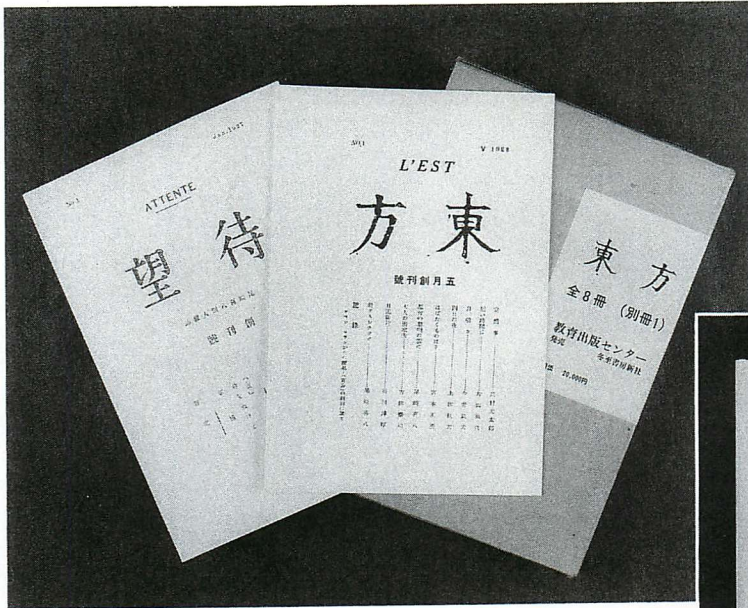
110 名もなき季節  
昭和五十一年十二月十日、創文社発行。A5判、角背、箱入。六六頁、定価千円。富士見在任時代の喜八が伊藤海彦、串田孫一、娘の栄子に宛てた書簡を編んだもの。編と後書は伊藤。

111 日光と枯草  
昭和五十二年十月三十一日、スキージャーナル発行。B6判、略装、箱入。三一八頁、定価千二百円。「自然と人間シリーズ」の(10)。これまで単行本に収められていない文章を主に、既刊の『さまざまの泉』『私の衆讃歌』『夕べの旋律』からの二十三篇を加えたもの。編者は串田孫一。表題は次に刊行される書物に名づけるつもりで喜八自身が考えていたものである。

112 山の繪本(新選覆刻日本の山岳名著)  
昭和五十三年九月一日、大修館書店発行。セット販売のため分買不可。

113 魂、そのめぐりあいの幸福  
昭和五十四年九月十五日、昭和出版発行。A5判、丸背、箱入。三三四頁、定価二千四百円。山と音楽にちなんだ詩文を串田孫一が、カットを描くとともに編集したもの。編集協力者は娘の栄子である。

114 わが音楽の風光  
昭和五十六年三月二十五日、六興出版発行。小B6判、二二〇頁、定価千二百円。音楽に関する詩と



文章を選んだもの。編者は伊藤海彦、巻末に伊藤の「尾崎喜八と音楽」という文章がある。

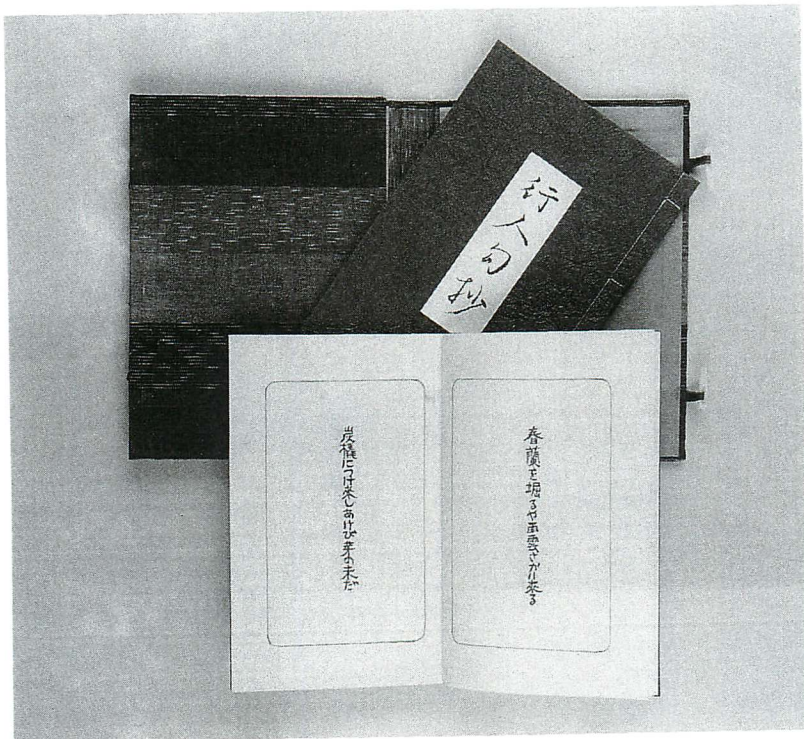
115 新訂 学校詩集 一九二九年版(共著)  
昭和五十六年十二月二十日、麥書房発行。二二八頁、定価二千五百円。四六判、角背、箱入。伊藤信吉監修。昭和四年に刊行されたアンソロジーの復刻、改訂版。一〇四頁から一〇八頁にかけて、喜八の詩「仲間」、「言葉」が収められている。

116 復刻版 南有集(共著)  
昭和五十七年八月三十一日、永田書房発行。一〇一頁、定価三千五百円、限定六〇〇部。菊判、角背、箱入。

117 復刻版 東方  
昭和五十六年九月一日、教育出版センター発行。喜八の編集になる同人誌「東方」全八冊に個人雑誌「待望」(昭和二年)一冊を加えて復刻し、一つの箱に収めたもの。菊判、定価二万六百元、限定一〇〇〇部。

118 自註 富士見高原詩集  
昭和五十九年七月十五日、鳥影社発行。先に刊行された青蛾書房のものが、限定発行で手に入りにくいものとなったので、新しい装いで復刻された。内容は青蛾書房版と変っていない。装幀は串田孫一。

119 行人句抄  
昭和六十年二月四日発行。伊藤海彦の選んだ行人



昭和56年～平成5年  
没後

(尾崎喜八の排号)の句二十篇を山室眞二が木版  
手摺した私家本。限定三三部。

### 120 ベートーヴェン

昭和六十二年二月四日、水族館発行。富士見在住時代、昭和二十五年の三月四日夜、喜八が松本で行った講演の草稿。ペン書きの自筆をそのまま写真版とした。限定三五〇部、頒価三千五百円。装幀串田孫一。後記は夫人の尾崎実子。

### 121 音楽への愛と感謝

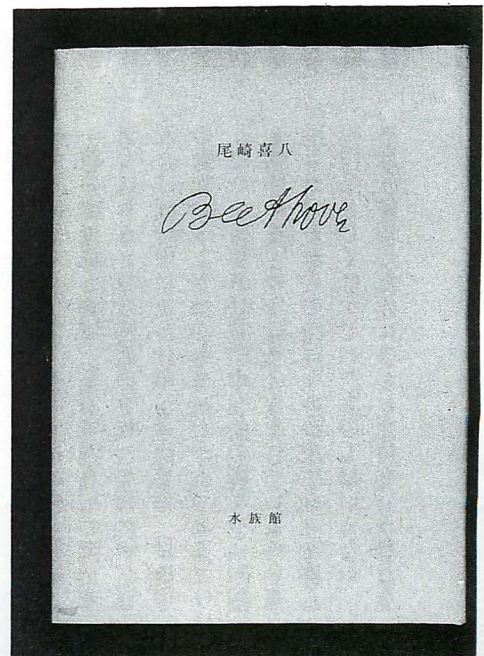
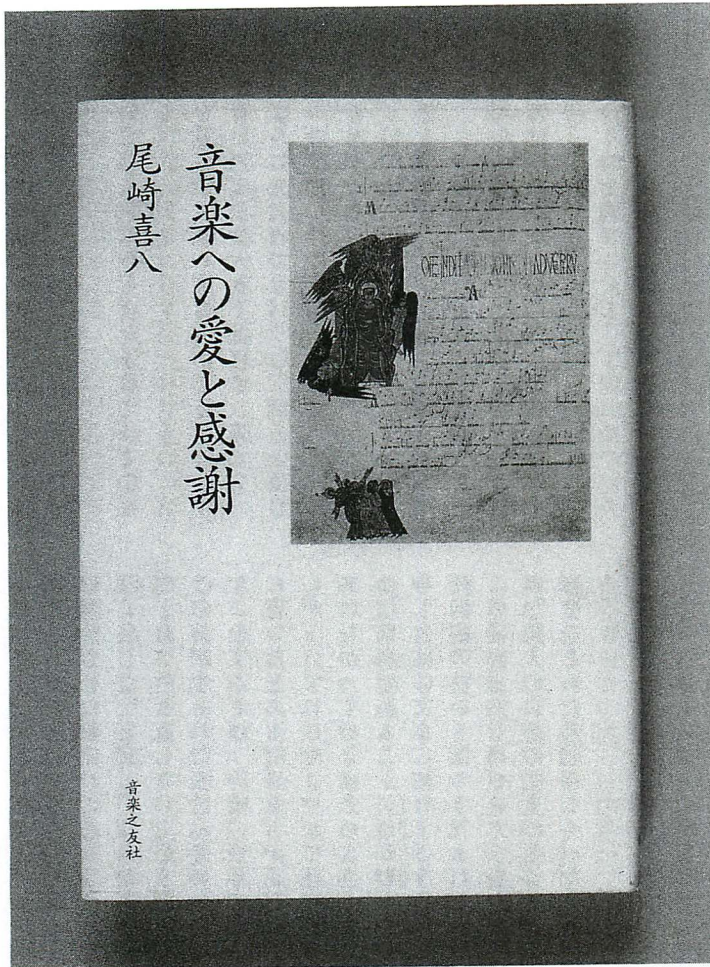
平成四年一月三十日、音楽之友社発行。三一二頁、定価二千四百円。四六判、丸背、カヴァー付き。装幀菊地薫。昭和四十七年に新潮社から刊行されたものの復刻版。樋口隆一の解説、尾崎栄子による音楽関係年譜、自筆原稿の写真が加えられている。

### 122 山の絵本

平成五年五月十七日、岩波書店発行(岩波文庫)。三五〇頁、定価六二〇円。カヴァー付き。カヴァーに初版では口絵となっていたアヘッセの水彩画が飾られている。解説・串田孫一。

### 〔編集部から〕

本文の著作の撮影は、ほとんどが三宅岳氏によるものですが、以下の数点に関しては編集部で別途撮影いたしました。8、9、10、25(石田二三夫氏)、65。



# 尾崎喜八への旅

## その二

伊藤海彦

詩集『花咲ける孤独』の巻頭に「告白」という詩がある。

若葉の底にふかぶかと夜をふけてゆく山々がある。

真昼を遠く白く歌い去る河がある。

うす青いつばさを大きく上げて

波のようにたたんで

ふかい吐息をつきながら 風景に

柔らかく目をつぶるのは誰だ。

鳥か、

それとも雲か。

疲れているのでもなく 非情でもなく、

内部には咲きさかる夢の花々を群らせながら、

過ぎゆく時を過ぎさせて

遠く柔らかに門をとじている花ぞの、

私だ。

喜八のもっとも充実した、完成度の高いこの詩集の作品のほとんどは富士見での日々から生まれているが、「告白」とその前に置かれている「冬野」の二篇は富士見に移る直前、昭和二十年、終戦の年の作品である。創元社版の『現代日本名詩集』第五巻の後書によれば「終戦のときの荒涼とした十一月に千葉県三里塚に近い田舎で」書いたとある。この「告白」について、後に編んだ『自註富士見高原詩集』で喜八は「…荒廃の跡に立って、私は

元来人間の幸福と平和とに捧げるべき自分の芸術を、それとは全く反対の戦争というものに奉仕させたおのれの愚かさ、思慮の浅さを深く恥じた」と記し、これから全く無名の人間として生き直したいという願いのなからこの詩が生まれたと言っている（記憶ちがいかこの文章では「終戦の翌年の春の或る夜」に書いたとある。どちらが正しいかは判らないが、いずれにせよやがて花咲ける孤独の高峯にむかつて歩きはじめようとする時のかな前奏であることにはかわりない）。喜八自身も自註の文章に続けてこう書いている。「起死回生の勢いも潔さも見られないが、それはこの場合当然な事であり、むしろ悪夢から覚めた詩人の良心の、まだどこことなく頼りない、音をひそめた最初のしらべだと言うべきであろう」

この文章に記された悪夢は私たちにしてもたしかに悪夢というべきものだったが、喜八にとってはさらに大きなものだったにちがいない。何故なら私たち若い者は終戦と同時に一種の虚脱感と安堵、そして明日への漠たる不安はあるものの解放感を味っていたが、喜八には戦時中にした仕事への決算書、世の中の批判をつきつけられていたからである。

たしかに喜八は戦時中『此の糧』や『同胞と共にあり』の二詩集に含まれている詩を多産した。それらの詩は今の時点で見ると喜八の作品としてはすぐれたものとはいえない。やはり課題のために書かれた詩という感じを



ぬぐいさることはできない（これは今でも、新聞などで年頭とか成人の日とかに写真につけた詩として発表されるものにはいい作品がないのと同じである）。私はこの時期の詩人を弁護するつもりはないが、戦後すぐ手のひらをかえしたように喜八を非難し、戦争協力者呼ばわりをした人たちのようにはありたくない。それらの人々のほとんどは何もしなかったが、当時かくれみものとして通用した国文学の詩歌について書くか、同盟国のドイツの詩の翻訳などで巧みに逃げていただけのこと、決して抵抗の詩を書いて戦争否定と自由の旗をふりかざしたりはしなかったのである。にもかかわらずそうした人たちが——ことに親しい友人たちが、悪意をこめて喜八を非難し、遠くから詩人を見つめるなり、さつと道をそれて顔を合わすまいとしたりしたのだ。むしろ喜八がそうした詩を書いているとき意見をのべて争ってまでも止めさせようとするのが友情であるはずなのに。喜八の悪夢は、だから戦争そのものの時代だけではなく、その後深い失意をとまなげてやってきたのである。

喜八は詩文集『花咲ける孤独』の巻末の略年譜で十二月八日の開戦にあたって「ここに至るまでの事の真相に一切無知の私は愚かに、単純に国難と信じた」と書いている。しかし愚かだったのはこの詩人だけではない。私にいわせるなら国民のほとんどが愚かであった。「一切無知」でない人間はとうの昔に刈りとられ、軍部とか極右とかに嫌悪感をもつ者も人前では口をとぎさざるを得ない状況がす

でに出来上っていたのだ。情報源に溢れている今の若い人には恐らく理解し難いだろうが、昭和の初めから周到につき重ねられた国家主義的な野望が、充滿し、気づいたときにはもうそれを止めることが出来なくなっていたのは事実である。喜八は先の文章のつづきにこう書いている。「前線で尽すことのできない国民

の義務を、後方で一致団結している同胞と共に果たそうと思った」と。しかしなぜそのことが「そして求められればいわずの愛国詩も書き……」という行為にむすびついたのだろうか。別の文章で、「いわゆる銃後の国民の一人として、詩という仕事によっていささかも国に尽したいと思った」とあるが、そのときなぜ喜八は無名の国民の一人として隣組長や防火隊長をひきうける所々とどまっていられなかったのだろうか。たしかに詩人自身というように戦時中の詩も「決して憎悪を煽って」書かれはしなかった。が、それまで西欧の文明から吸収していたはずの人道主義的なものが、そのとき誤ったむすびつきをしたことは否めない。それをさせてしまったのは明治生まれの、それも東京下町の血であったような気がする。喜八は商家の生まれだが、職人の血をうけた光太郎とその一点では非常に似かよっている。美点であるべき潔さのようなものが、裏がえしになって負にむすびついたといった所がある。光太郎のいう「天子危うし」と喜八の「国難」には非常に近いものがあって、少々俗な表現だが委細をたしかめる前に裾をからげて火事場にむかつて走り出す江戸町人

に通じるものがあつたような気がしてならない。

くりかえすようだが、私はこの時期の喜八を愛するあまり弁護しようとしているのではない。だが、全詩業の中で先入観をもって低くみられがちな戦時中の詩にも数々の佳品がある。たとえば世にもっとも広まった「此の糧」などはこの詩人ならではの秀れた作品だと思う。これに関して河盛好蔵氏は「私はこの名作が文学者愛国大会の席上で作者自身によって朗読されたとき、満堂の人々のあいだにまき起した深い感動を今でもはつきりと覚えていたが、あの感動は、必死になって戦争を闘っている国民大衆のその健気に感動した作者自身の美しい感動が、そのままあの会場に集まった人たちにまっすぐに伝わったからであつて、戦争讚美の詩などでは決してない」と書き、これを喜八の詩のひとつの流れ、勤労詩であるといっている。至言だと私も思う。しかし、今よみかえしてもすばらしいその詩も終聯近くに「大君の壘の広野に芋は作りて／これをしも節米の／混食の料とするちようかたじけなきよ」といった言葉が出てくる。これは「大詔奉戴」や「特別攻撃隊」などに通じるもので、喜八らしい自然のたまものへの感謝が時局的な出来合いの言葉にたやすく結びついているのが私としては残念でならない。なぜ喜八は菜園の白菜をうたった五行の清々しい詩や、これも喜八らしい情感に支えられた「三つの卵」のように「此の糧」の芋をうたわなかったのだろうか。

口語詩を詩として完成し確立したのは喜八だという伊藤信吉氏の指摘があるが、その卓抜な言葉の技術がむしろこの時期の詩人にとっては不幸であったといえる。もつとちがう……たとえば象徴的な詩人だったとしたら、あるいは詩が書けなくなつたかもしれない。他の人間だったら危く散文になりかねないものを見事に詩に仕立てあげてしまう才能が災いしたのである。この時期、自分の詩を作る技術が喜八本来の詩のよさをさまたげていたとは、恐らく詩人自身思つてもいなかっただろう。そして、永いあいだ海外の親しい詩人や作家によって培われたはずのヒューマニズムが、向う三軒両隣の人情に姿を変えていたことにも。

森と山野と岩石との国に私は生きよう。  
そこへ退いて私の絃を懸けなおし、  
その国の荒い夜明けから完璧の夕べへと  
広表をめぐるすべての音の  
あたらしい秩序に私の歌をこころみるのだ。

今にしておもえば求道者的なこの詩人にとつて悪夢は必要だったのかもしれない。強固な意志をもつ詩人は心身共に傷ついたとき、外からの圧力を自分自身の内側に凝縮させ、高峯への飛翔力に変えることができたのだから。「新らしい絃」という詩の二聯から三聯はこう歌われている。

なぜならば私はもう此処に

私を動かして歌わせる  
顔も天空も持たないから。  
歌はたましいの深い美しいおののきの調べだ。

それは愛と戦慄と自分自身の衝動への抵抗なしには生れ得ない。

私は逆立つ藪や吹雪の地平に立ち向かおう。  
強い爽かな低音を風のように弾きぬこう。  
だがもしも早春の光が煦々として  
純な眼よりもつと純にかがやいたら、  
私の弓がどの絃を  
かろい翼のように打つだろうか。

この詩についての自註の文章で喜八は「第二聯の『愛と戦慄と自分自身の衝動への抵抗なしには生れ得ない』は、自分の作詩上の心の用意を音楽家のそれになぞらえて、今後は一字一句たりとも興に任せて放漫には書くまいという決意を示した自省の言葉である」と記している。この文章は先にも述べたように二十数年も後に書かれたものだが、「今後は一字一句たりとも……」とは正にその時詩人が何度となく心にくりかえし自分にいきかせていた思いであろう。そしてそれは悪夢がさめてこそ生まれべき美しい自省にほかならなかった。

## 平成四年のできごと

平成四年（一九九二）は尾崎喜八の生誕百年にあたり、いくつかの記念行事が行われたので、以下にその記録も兼ねて詳報を掲載する。

**蠟梅忌** 毎年二月の最初の土曜日に行われてきた蠟梅忌は、生誕百年に鑑み取りやめとし、各自喜八の命日に墓参する形式で故人を偲ぶ趣向にするというお達しが世話人からあり、多数の方々が命日（二月四日）およびその近辺に明月院墓所を詣でられた。

**みずならの会** 第四回までは尾崎栄子が幹事を務めていたが今年から持ち回りとすることになる。第五回は、生誕百年を記念して喜八ゆかりの地・富士見高原で六月十九日～二十一日に行われた。

十九日、喜八が戦後七年間住んでいた分水荘の森、ベニバナイチヤク草の群生地、喜八最後の作詞となった富士見小学校の校歌碑、アララギ派の歌碑のある富士見公園などを見てまわる。夜は入笠会館にて西村豊氏の講演（高原に生息するヤマネの生態についてのスライド上映と講演）。二十日、早朝に小宮静雄氏の指導による探鳥会の後、入笠山へマイク

ロバスで登る。高所は折悪しく降雨だったが、湿原散策、入笠登山などを行う。夜、富士見町町民センターにてバロック音楽演奏と講演の集いを開く。立川叔男氏がバロック・リュート他四種類の古楽器によりパーセルのエア・ロンド他十数曲を、古楽器についての説明を交えて演奏。講演は嘉納忠明氏「富士見と尾崎喜八の文学」、岡田朝雄氏「日没時の蝶」花咲ける孤独』より」。なお今回の「みずならの会」について富士見町公民館では前以て有線放送にて町民参加を呼びかけていたので、百名を超える参加者が集まった。幹事は堀隆雄氏、関野禎子氏、石田二三夫氏。

**碑前の集い** 八月三十日、富士見町で恒例の詩碑「富士見に生きて」碑前の集い第13回が行われた。快晴に恵まれ、八ヶ岳は終日くつき姿を見せていた。開会の言葉に引き続き喜八の詩の朗読テープを聴く。孫娘樋口美砂子により献花。富士見町議会議長小池氏の祝辞。富士見高原中学校校長小口崇博氏の喜八に関わる過去の感動的なお話、嘉納忠明氏の富士見を愛した喜八の仕事についてのお話があった。最後に尾崎実子の挨拶で閉会。二次懇談会が会場を変えて行われた。参加者八十余名。なお、この碑前の集いは毎年富士見尾崎会の諸氏のお世話で行われ、集いの後の懇談会のご馳走は尾崎会のご夫人がたの手で供されている。

**朝日カルチャーセンター新宿 東京・新宿の朝日カルチャーセンターに於いて公開講座「詩人尾崎喜八生誕百年」**が三回にわたって開かれた。内容は、十月二十四日「尾崎喜八とヘルマン・ヘッセ」渡辺勝氏（埼玉大学教授）、同三十一日「尾崎喜八と音楽」樋口隆一氏（明治学院大学助教授）、十一月十四日「尾崎喜八と自然」伊藤和明氏（文教大学教授）で、これまでの文学評論がとらえ切れていなかった喜八の文学の全貌を、それぞれの専門分野の視点から考える有意義な講座となった。

**生誕百年記念の集い** 十一月一日、東京・青山のNHK青山荘に於いて、蠟梅忌のメンバーにより行われた。世話人は伊藤和明、川嶋利哉の両氏。会の主な内容は以下のように華やかなものとなり、盛況のうちに終了した。

祝辞 〓 富士川英郎氏、謝辞 〓 尾崎実子、お話し 〓 三宅修氏、喜八についての思い出・エピソード 〓 樋口治久氏、小林義郎氏、中原好文氏などのお話に加えて、杉浦勝彦氏によるフルート演奏、嘉納忠明氏による尾崎喜八年譜発表などがあった。また喜八による自作詩の朗読テープをみながら聴き故人を偲んだ。その他、石黒敦彦による富士見町の尾崎記念室の建設進行についての報告、伊藤氏による今後の蠟梅忌開催についてのお話などがあった。司会は川嶋氏。参加者八十一名。

**鎌倉文学館 『鎌倉と詩人たち』展**（十月十

六日～十一月二十九日）に於いて、喜八の展示コーナーが設置された。昨年亡くなられた山崎英治氏の遺品も展示されている。

**その他** 甲南大学グリーククラブの演奏（十二月二十三日）にて、多田武彦氏作曲による喜八の詩五篇からなる男声合唱「組曲『秋の流域』」の発表会。五篇の内訳は、「秋の流域」、「夏の最後のバラ」、「雲」、「美ヶ原熔岩台地」、「追分哀歌」である。

なお最後に、喜ばしいニュースとして、岩波書店から平成五年五月十七日に岩波文庫の一冊として『山の繪本』を出版したい旨の交渉があったことをお知らせする。

### 富士見町尾崎記念施設の進行について

#### 平成四年の状況について

一月十四日 前年の晩秋、長野県諏訪郡富士見町で建立の話が進行している喜八の記念施設に対して、遺族からの喜八の遺品寄贈品の「目録」を提出して欲しいとの要請が町からあった。そこで急遽、平成三年の十二月末までに、三人の会員の方にも手伝っていたいて、詳細なリストを作成し、その製本まで尾崎遺族が行う。点数は二、二一九点に上っ

た。このリストを遺族（尾崎栄子、石黒敦彦）が富士見町の三井春富町長に町役場に於いて手渡した（但し品物は現在収納する施設がないので、建物<sup>が</sup>完成するまでは遺族側に預って欲しいとのこと）。

三月二十日 富士見町の喜八記念施設の展示計画案を委嘱されていた遺族および企画委員会は、案の概要を作成、石黒敦彦が富士見町教育委員会に持参して了承を得た。

五月十五日 右の展示計画案『富士見町コミュニティ・プラザ 尾崎喜八記念室（仮称）基本計画報告書（B4判七二頁）』を作成、尾崎喜八遺族ならびに尾崎喜八研究会「尾崎喜八記念室」企画委員会から三月三十日の日付を付して、富士見町長に百五十部を提出。

その後の推移について 十月には富士見町コミュニティ・プラザの起工式が行われた。喜八の記念施設はその内の二階部分の約三〇〇㎡を占めることが決定している。

（石黒・記）

尾崎喜八資料の刊行遅延についてのお詫び

『尾崎喜八資料』8号の刊行が大幅に遅延したことをお詫び申し上げます。原稿の集まる

のを待って、九一年暮れに編集にかかりはじめ、三宅岳氏にご協力いただいて喜八の全刊行物の写真撮影をするところまで進めておりましたが、その後前記のような富士見町からの突然の要請に翻弄されて、資料の編集実務を担当している石黒、尾崎の両名が、やむなく遺品リストの作成や基本計画の作成、提出書類の編集にすべての精力を傾げざるをえなくなりました。こうした状態が九二年の五月まで続き、その後は、石黒が生業の多忙さに追われて書誌年譜のレイアウトに手がつけられず、今日まで遅延してしまっただ次第です。

なお第9号は九三年二月刊行予定でしたが、8号の遅延にともない九三年九月刊行に順延されます。どうかご了承下さい。（石黒・記）

### 編集室から

第8号は刊行が大幅に遅れてしまいました。

書誌年譜の部分を充実させて、富士見の記念施設が完成したあかつきには、その部分だけ別刷りにして著作カタログとして頒布できれば、などと夢想していたもので、レイアウトにも写真資料の追加にもつい欲が出たのがよくなかったのかもしれない。けれどもそのおかげで、書誌としては豊富な写真資料に彩

られたかなり画期的なものになったのでは、と思います。ただしそれは本来この書誌のもとなった『アルプ』尾崎喜八追悼号の伊藤海彦氏の年譜（レイアウト・大洞正典氏）が画期的だったからであり、今回はそれを判型を変えて若干の追加をしたに過ぎません。むしろ今回のレイアウトが『アルプ』のものに屋上屋を重ねたような、余分なものになってはいまいかと心配しております。

現在では、その「アルプ」喜八特集号もとうに品切れとなり、古書店でもあまり見かけないようですので、せめてその外観だけでも誌上に掲載しておこうと思ひ、表2の写真として使用してあります。

今回は写真を思い切り使った派手なものになりましたが、9号からは旧に復して地道な資料・研究の紹介を続けます。（石黒敦彦）

尾崎喜八資料・第八号

一九九三年三月二十五日発行・非売品

ISSN 0911-3339

発行・尾崎喜八研究会

鎌倉市山ノ内一九七―五一（〒274）

電話〇四六七―二三―一七六一

振替 横浜7―33012

尾崎喜八研究会

印刷 住友出版印刷